子どもの成長に寄与する「いのち」の教育のあり方

（子どもの死生観についての発達段階に関する意識調査）

兵庫・生と死を考える会
高木　慶子
近藤　靖宏　原　実男
山下　文夫　西本　義之
赤澤　正人　伊藤　博
伊藤　玲子　服部　洋介
古田　晴彦　松本　信愛

1　研究目的

ハンガリーのマリア・ナギーは1948年に子どもの死生観について研究を行い、自分を含めたすべての生命に死が訪れるという死の普遍性と死ねば生き返ることはできないという死の絶対性の認識が確立されるのは9才以降であると報告した。昨年、我々は４才から９才までの幼児・児童の死生観について、個別面接による調査を実施した。その結果、死の普遍性と死の絶対性の認識が確立するのは７才以降ではないかとする結果を得た。（平成１５年度ヒューマンケア研究助成成果報告書参照）

今回は調査対象を小学１年生（６、７才）から中学２年生（１３、１４才）に広げ、死の普遍性と死の絶対性の認識が確立する時期について昨年の結果を検証した。また今回の調査では死生観が何に影響され、どのようなことと関連しているかも調査した。例を挙げれば、自然体験と死生観との関係やメディアがどのように死生観に影響を与えているのかについてである。これらの結果を分析することによって死生観に関して影響を及ぼしたり配慮しなければならない要因を探り、いのちを尊重する心情や態度を養うための具体的方策を提案したい。また不登校児童・生徒の死生観のデータから有益な示唆を得たいとも考え、調査対象に含めている。

2　研究方法

（１）対象と時期

２００４年１１月から１２月にかけて兵庫県内（一部大阪府）の公立の小学校、中学校および不登校児童・生徒支援施設の児童・生徒を対象とした。調査実施者は３７１９名であった。学年・男女別の内訳は表１に示すとおりである。

表1

	小学１年	小学２年	小学３年	小学４年	小学５年	小学６年	中学１年	中学２年	合計（人）
男子（人）	182	194	237	228	197	219	314	388	1959
女子（人）	180	183	171	210	186	183	284	363	1760
合計（人）	362	377	408	438	383	402	598	751	3719

（２）調査と分析方法

①調査方法

質問紙法におけるアンケート調査を実施した。アンケート（図１）は小学１年生から４年生を対象としたもの（以下アンケートA）と小学５年生から中学２年生を対象としたもの（以下アンケートB）の２種類に分けた。実施に際しては条件が異なることがないように実施要領を配布した。アンケートは実施担当者のもと、教室で一斉に児童・生徒が設問の選択肢に○をつけていく方法である。設問には死生観を問うものが含まれているため実施前の配慮と実施後にいのちの大切さついてのフォローを依頼した。

小学１年～４年生用

アンケートのおねがい　図1

これはテストではありません。兵庫県の子どもたちにおねがいして、いのちについて調べるためにおこなうものです。思ったことをそのまま答えてください。

こたえ方

カレーライスがすきですか？

とてもすき	かなりすき	ふつう	すこしきらい	とてもきらい
1	②	3	4	5

あなたがもしカレーライスを「かなりすき」だと思ったら上のように２番のところを○でかこみます。

1　まず、あなたの学年、男女などを教えてください。

（１）学年（1.小学１年　2.小学２年　3.小学３年　4.小学４年）

<○で１つかこむ>

（２）男・女（1. 男　2. 女）<○でかこむ>

②結果のグラフ化

結果を図２に示すように折れ線グラフで示した。縦軸は学年別の人数が一定でないため学年ごとの回答の割合（百分率）を示している。設問に対する男女別の学年推移が分かるようにした。

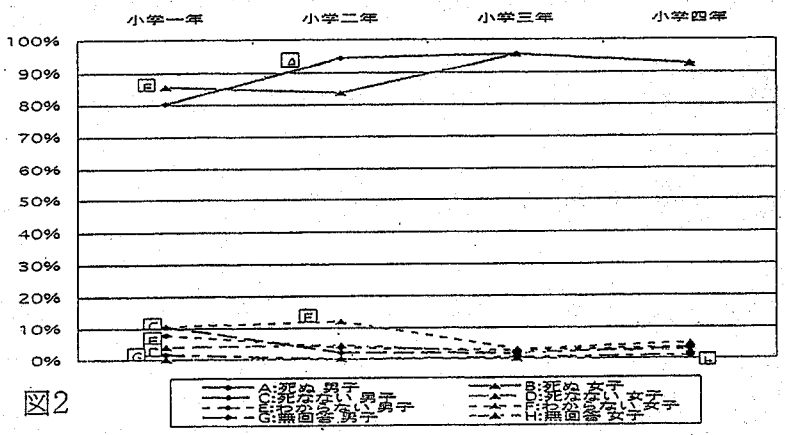

図2

3　調査により判明したこと

アンケートA

（1）動物や植物及び無生物に対する生命としての認識について

①クジラに対する認識について

図３の「クジラは生きていますか？」の質問に対して、小学１年生（以下小１）では揺らぎがあるが小２でほぼ生命としての認識が確立する。

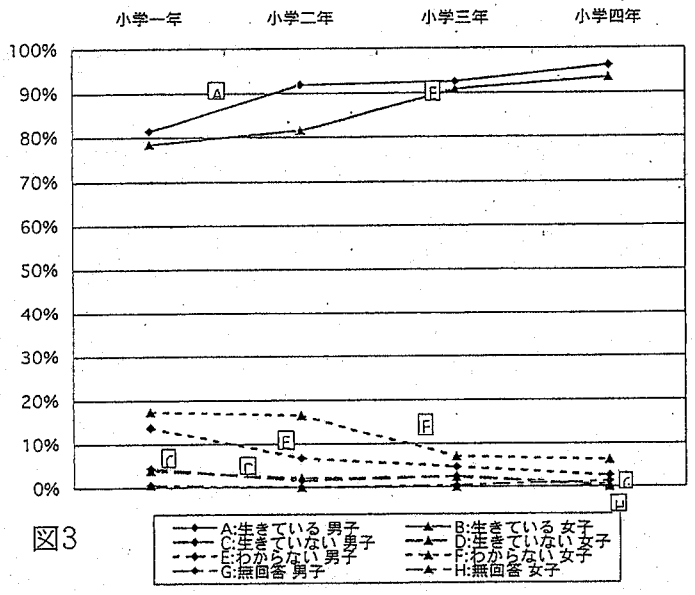

図3

②自動車に対する認識について

図４の「自動車は生きていますか？」の質問に対して、小１で３割が自動車を生きていると認識している。その後２割弱で推移する。「生きていない」が小３から小４で減少し、同時に生きているが増加に転じている点に注目したい。高学年になっても機械を生命と見る率が高い。この理由として以下の理由が考えられる。

・この質問は「生きていない」と否定を要求する質問文である。

・生きているという言語の意味が「動く、機能する」を包含してとらえている可能性がある。

③タンポポに対する認識について

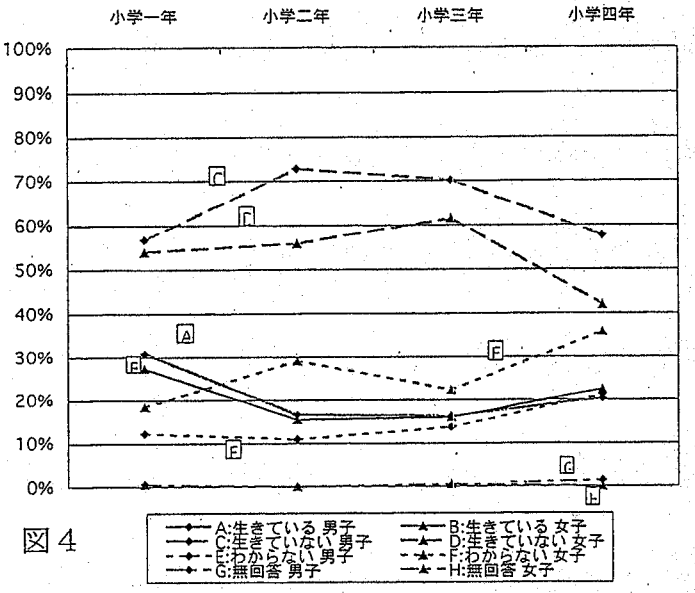

図４

図５の「タンポポは生きていますか？」の質問に対して、小１から一貫して「生きている」とする数値は増加する。生命としての認識が確立するのは小２以降であると考えられる。また植物を生命として認識する割合はクジラより１０％ほど数値は低い。

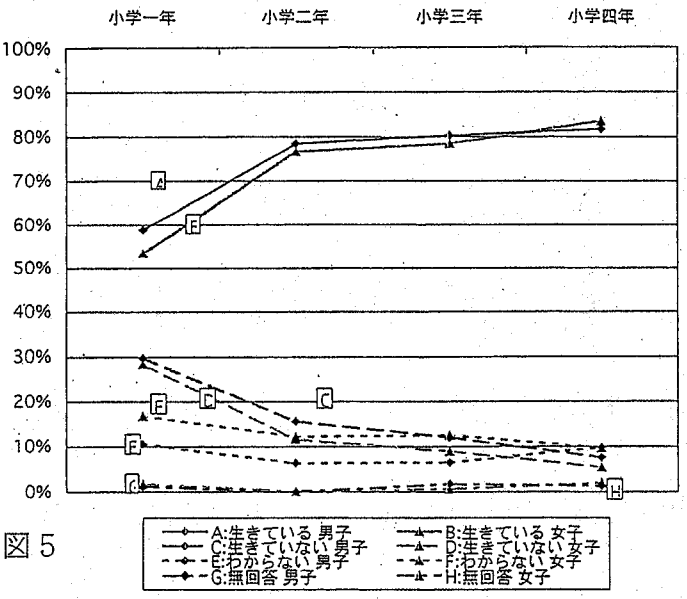

図５

（2）家庭での生き物の飼育経験

「いままで家でペットを飼ったことがありますか？」の質問に対して小１から飼育経験が増加する。男女差はない。

①ペットの死の経験について

図６の「自分が世話をしていたペットが死んでしまったことがありますか？」の質問に対して小１では５０％を超える児童が経験し、小４で７５％の児童が経験している。

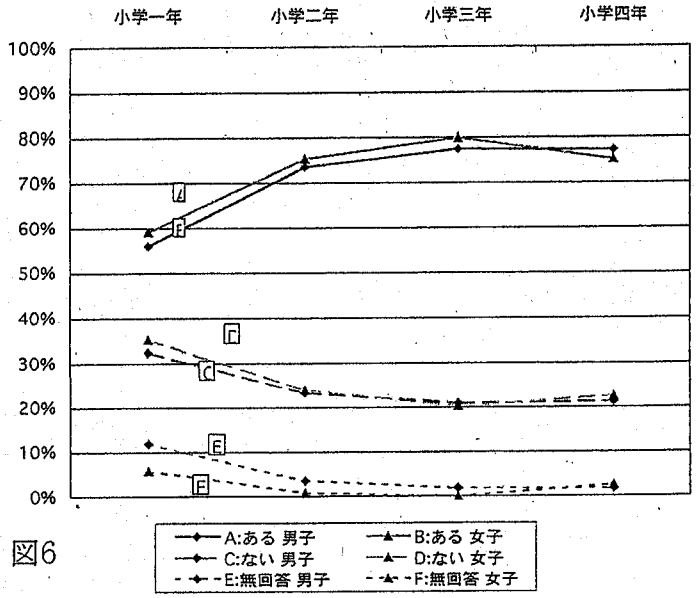

図6

②ペットの死に対する対処について

図７の「死んだペットをどうしましたか？」の質問に対して、一貫して墓を作ったが８０％ある。

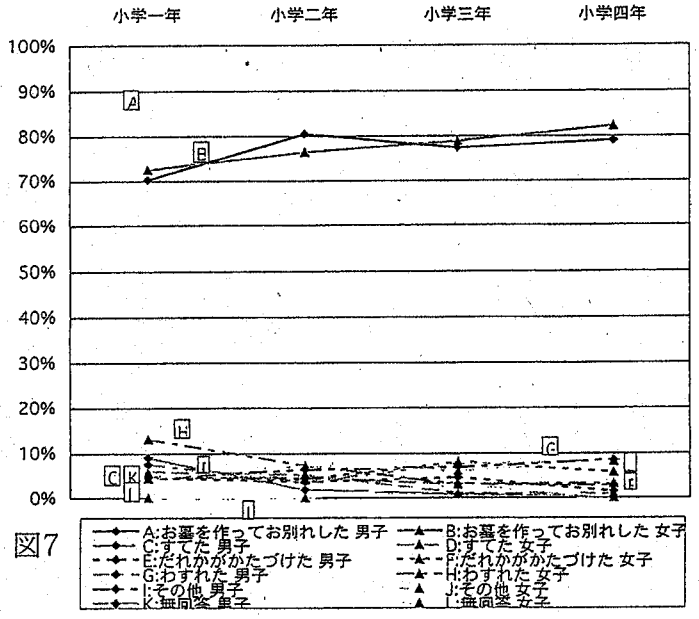

図7

（３）死の普遍性と絶対性について

①動物の死の認識について

図８の「犬や猫はいつか死ぬと思いますか？」の質問に対して、小１から小４にかけて漸増する。これは昨年の結果とほぼ同じである。

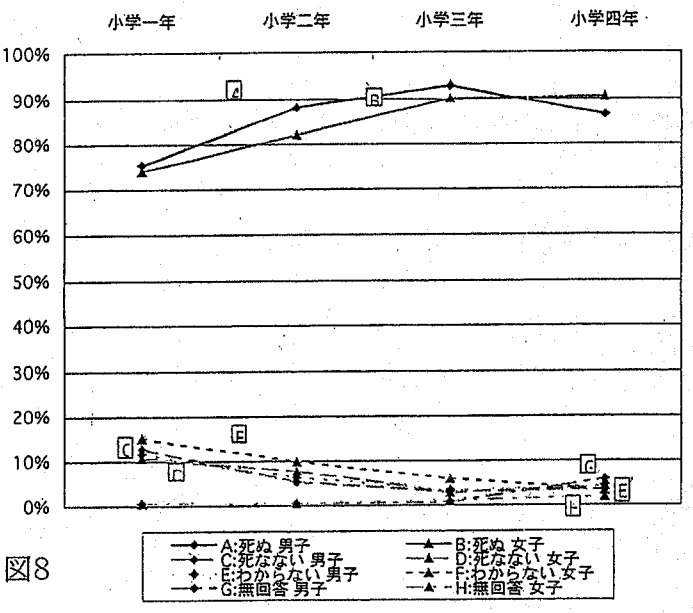

図8

②動物の死の絶対性について

図９の「学校で飼っている生き物は、死んでもまた生き返れると思いますか？」の質問に対して、性別、年代別の変化はほとんどなく、「生き返らない」が８５％で推移する。これは昨年の結果とほぼ同じである。しかし昨年の調査で９才の女児で「生き返る」が３０％と増加したが今回のデータではそのような傾向は見られなかった。「生き返れる」は５％程度存在し、「わからない」は１０％存在する。

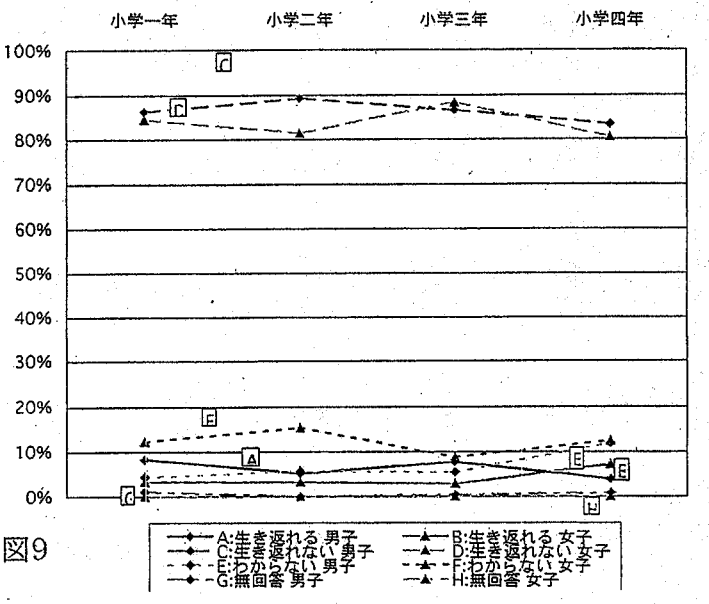

図9

③人の死の認識について

図１０の「人はいつか死ぬと思いますか？」の質問に対して、小１から小４にかけて漸増する。男子では小２で９０％に達する。女子は小３で９０％に達する。「死なない」と「わからない」を合わせた比率が１０％弱存在する。

④人の死の絶対性について

図１１の「人は死んでも、また生き返れると思いますか？」の質問に対して、「生き返れない」が８０％

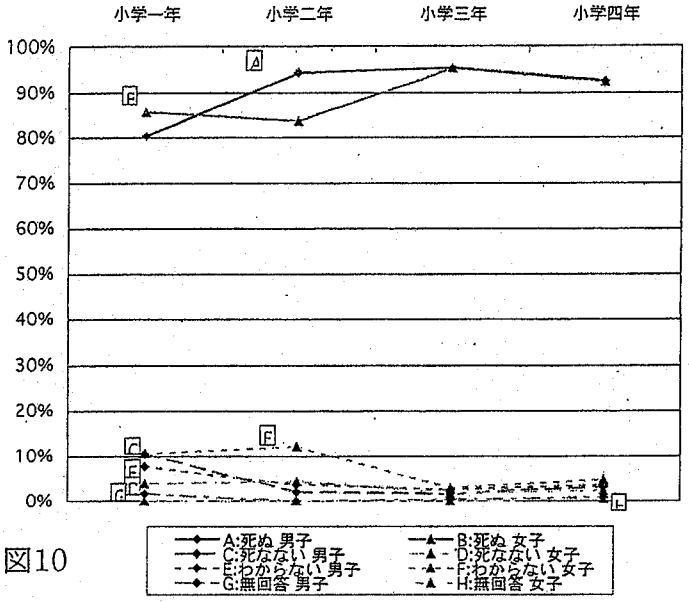

図10

か？」の質問に対して、小１の７０％弱から小３で９０％に漸増する。死の普遍性の認識が確立するのは小３（８、９才）以降と考えられる。これは７才で「死ぬ」が９０％となった昨年の調査と異なる結果になった。

⑥自分の死の絶対性について

図１３の「もし自分が死んだとしても生き返れると思いますか？」の質問に対して、生き返れないが８０％程度で推移するが小４でやや下がる。生き返れるは１０％程度で推移する。小４でわからないが増加し、死の絶対性に対する揺らぎが生じている。昨年の結果では７才で生き返れないが８７％となりその後７５％程度に落ち着く。７才以外のデータは今回の結果と整合性がある。

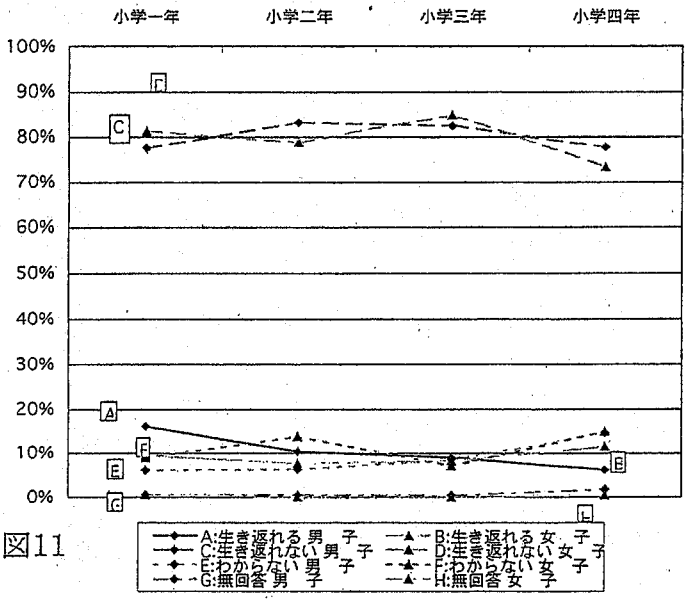

図11

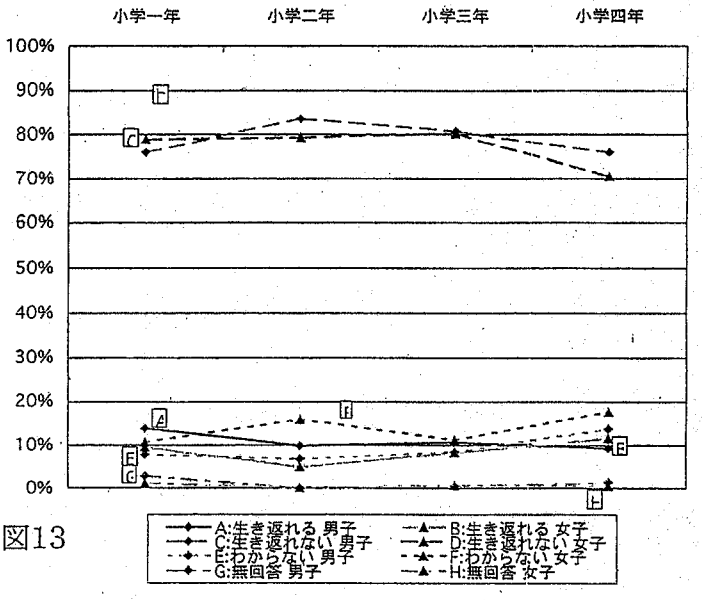

図13

で推移する。「生き返れる」は小１（１３％）から小４（６％）にかけて漸減する。「わからないは」１０％程度存在する。

⑤自分の死の認識について

図１２の「あなたは自分がいつか死ぬと思います

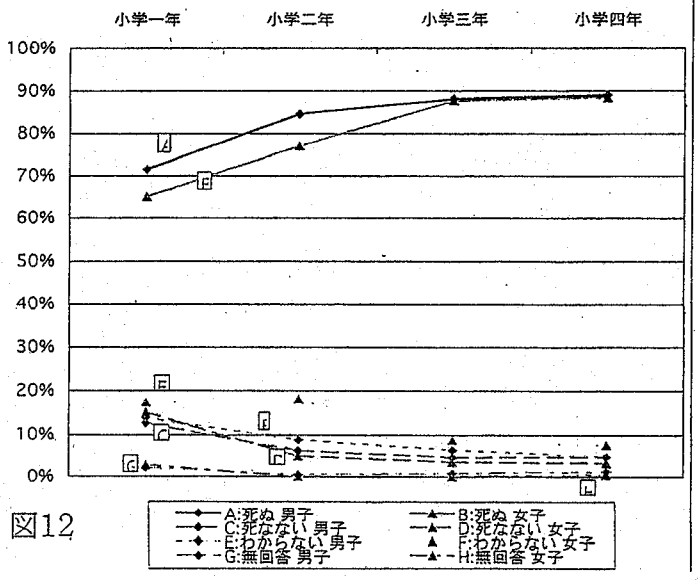

図12

⑦父母に対する死の認識について

図１４の「あなたのお母さんやお父さんはいつか死ぬと思いますか？」の質問に対して⑤とほぼ同じ推移をとる。小１の６５％から小４の８５％へと漸増する。

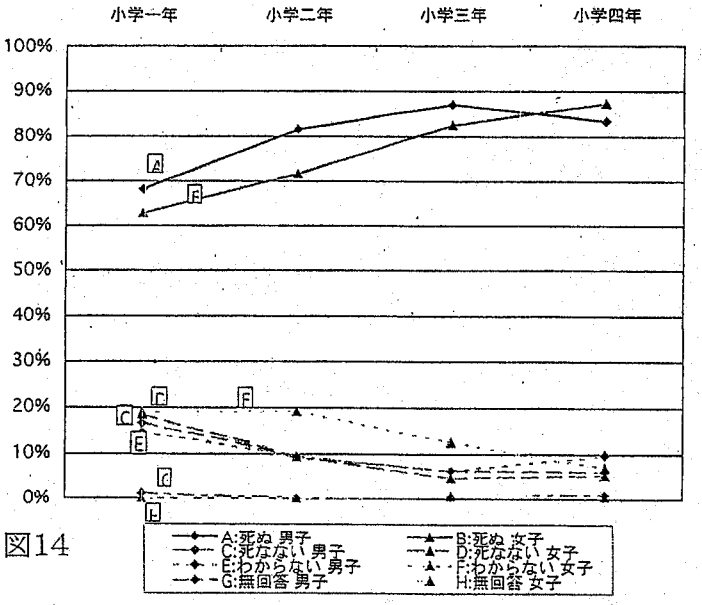

図14

死なないは２０％弱から小２で１０％弱に減少し、小３で５％まで半減し、小４は同程度で推移する。わからないは１５％から１０％弱へ漸減する。昨年の結果では６才では「死ぬ」が７０％で、７才以降は９０％程度で推移する。

父母も含めた死の普遍性の認識が確立するのは小３以降であると考えられる。

⑧父母に対する死の絶対性について

図１５の「もしあなたのお母さんやお父さんが死んだとしても生き返れると思いますか？」の質問に対して、生き返れないは７０％から８０％に漸増するが、小４でやや低下する。小１で生き返れるが１５％存在し、小３で７％まで低下するものの小４女子で１３％まで増加する。わからないは１０％程度存在し、小４でやや増加する。わからないは男子に比べて女子がやや多い。

昨年の結果では６才では「生き返らない」が６５％となり、７才は８５％に達する。それ以降はやや減少して８０％程度で推移する。

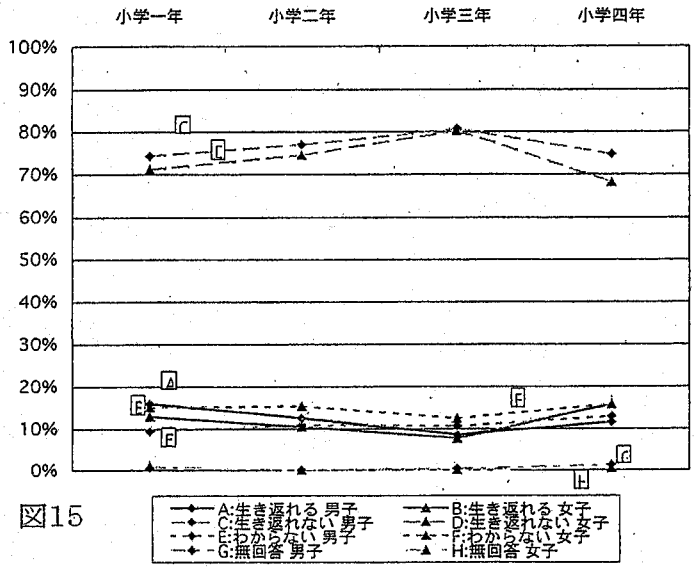

図15

【①から⑧のまとめ】

前回の調査では死の普遍性および死の絶対性は７才以降で確立するとした。確かに今回の調査でも７才における認識は低いとはいえないが、死の普遍性および死の絶対性の認識が確立するのは９才以降と考えられる。理由は自分の死と父母の死を含めた死の普遍性の認識が確立するのは⑤、⑦の結果から判断すると小学２年生から３年生の時期であるといえるからである。小学２年生は７、８才、小学３年生は９、１０才であり、死生観の確立を９才としたマリア・ナギーの報告と一致する。前回調査は面接法で今回は質問紙法によるアンケート調査であり一概に比較するわけには行かない。しかし死の絶対性については前回調査と整合性が見られ、７才で理解は深まっていることは確かである。また調査人数が前回は７才で８５人、今回の小１は２４７人となっていることも考慮しなければならない。

結論として、死の普遍性と絶対性の理解は７才で深まり９才以降で認識が確立するといえる。

（４）葬儀や墓参経験について

①葬儀の経験

図１６の「お葬式に行ったことがありますか？」の質問に対して、７０％弱で推移する。経験なしが２５％存在し、男女差はない。これは昨年の調査結果とほぼ同じである。表２は死の普遍性との相関関係を調べたものである。葬儀の経験が死の普遍性に対する理解を深めていることがわかる。死の絶対性との相関関係を調べたが関係はなかった。

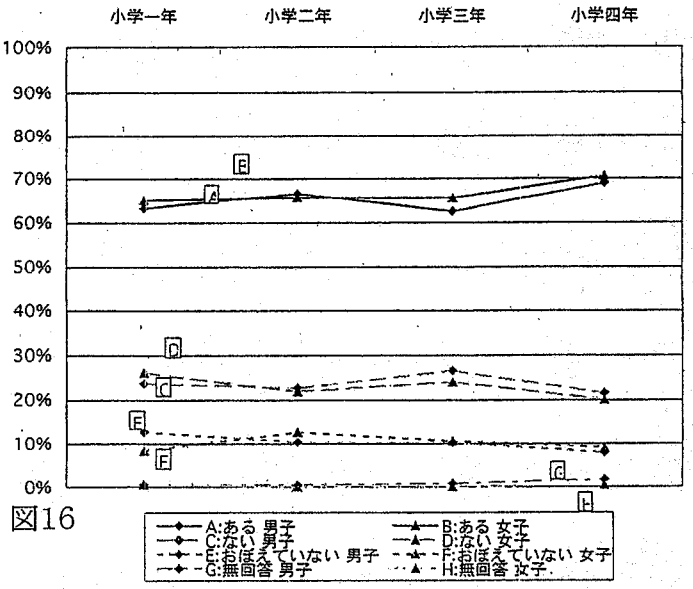

図16

表２　Q8:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q14:お葬式に行ったことがありますか？（横）

質問内容	ある		ない		おぼえていない		無回答	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
死ぬ	963	67.3%	325	22.7%	136	9.5%	6	0.4%
死なない	29	50.9%	22	38.6%	6	10.5%	0	0.0%
わからない	51	56.0%	21	23.1%	18	19.8%	1	1.1%
無回答	3	42.9%	1	14.3%	0	0.0%	3	42.9%
男女計	1046	66.0%	369	23.3%	160	10.1%	10	0.6%

②墓参の経験

図１７の「お墓参りに行ったことがありますか？」の質問に対して、「年１回以上墓参する」は３５％から５５％に漸増する。７％程度の生徒が墓参未経験である。これは昨年の調査結果とほぼ同じである。表３は死の普遍性との相関関係を調べたものである。墓参の経験が死の普遍性に対する理解を深めていることがわかる。死の絶対性との相関関係を調べたが関係はなかった。

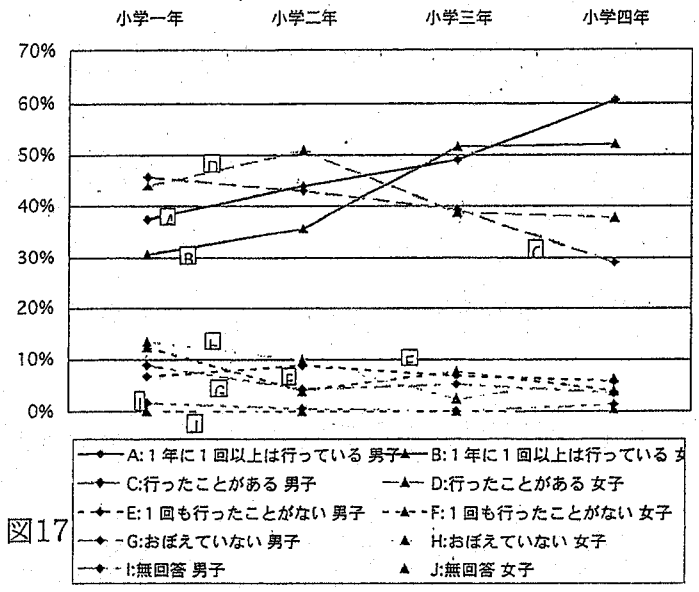

図17

表３　Q8:人はいつか死ぬと思いますか？(縦)
Q15::お墓参りに行ったことがありますか？（横）

質問内容	1年に1回以上は行ってい		行ったことがある		1回も行ったことがない		おぼえていない	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
死ぬ	672	47.0%	578	40.4%	92	6.4%	83	5.8%
死なない	19	33.3%	24	42.1%	9	15.8%	5	8.8%
わからない	31	34.1%	39	42.9%	7	7.7%	14	15.4%
無回答	2	28.6%	1	14.3%	0	0.0%	1	14.3%
男　女　計	724	45.7%	642	40.5%	108	6.8%	103	6.5%

（５）死生観について

①死の恐怖

図１８の「死ぬことはこわいですか？」の質問に対して、「怖い」が８０～９０％を推移するものの小３、小４で微減する。「怖くない」は１０％弱存在する。表４は死の普遍性との相関関係を調べたものである。死への恐怖と死の普遍性に対する認識とは相関関係がある。表５は死の絶対性との相関関係を調べたものである。死への恐怖と死の絶対性に対する認識には相関関係がある。

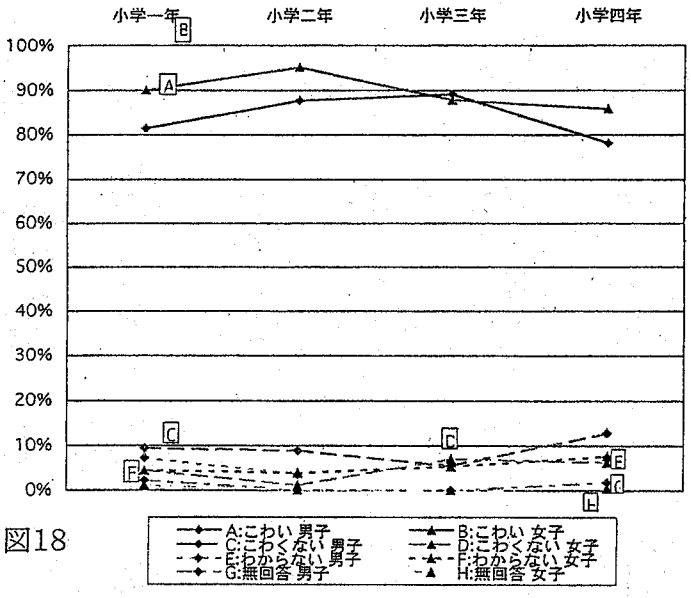

図18

表４　Q8:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q16:死ぬことはこわいですか？（横）

質問内容	こわい		こわくない		わからない		無回答		合計	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
死ぬ	1250	87.4%	99	6.9%	74	5.2%	7	0.5%	1430	90.2%
死なない	47	82.5%	6	10.5%	4	7.0%	0	0.0%	57	3.6%
わからない	75	82.4%	5	5.5%	8	8.8%	3	3.3%	91	5.7%
無回答	1	14.3%	1	14.3%	4	57.1%	1	14.3%	7	0.4%
男　女　計	1373	86.6%	111	7.0%	90	5.7%	11	0.7%	1585	100.0%

表５　Q9:人は死んでも、また生き返れると思いますか？（縦）
Q16:死ぬことはこわいですか？（横）

質問内容	こわい		こわくない		わからない		無回答		合計	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
生き返れる	124	81.0%	20	13.1%	8	5.2%	1	0.7%	153	9.7%
生き返れない	1112	88.0%	82	6.5%	61	4.8%	8	0.6%	1263	79.7%
わからない	133	83.1%	9	5.6%	18	11.3%	0	0.0%	160	10.1%
無回答	4	44.4%	0	0.0%	3	33.3%	2	22.2%	9	0.6%
男女計	1373	86.6%	111	7.0%	90	5.7%	11	0.7%	1585	100.0%

②生きていくことがいやになった経験（自殺への衝動）

図１９の「生きていることがいやになったことがあ

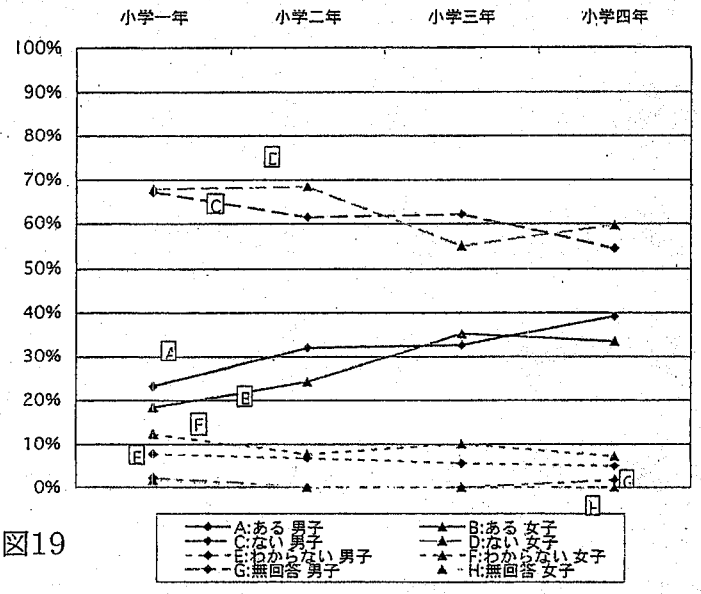

図19

りますか？」の質問に対して、「嫌になったことがある」が２０％から３５％に漸増する。

③死後の世界

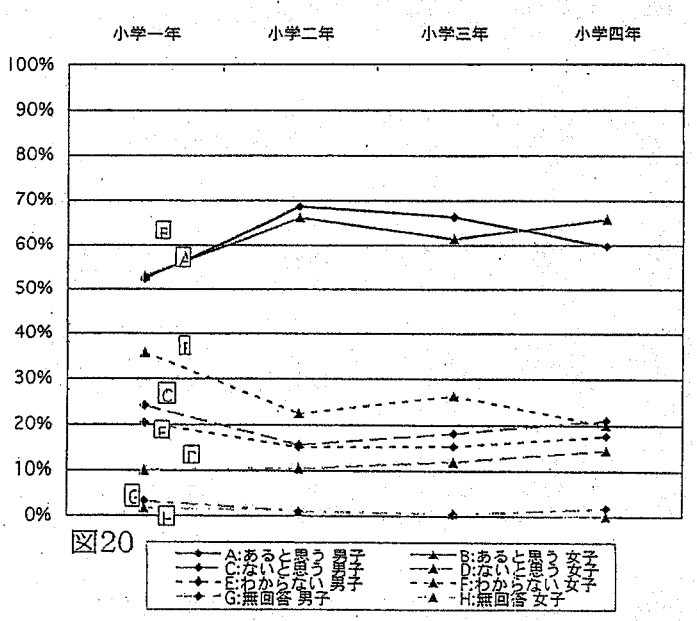

図20

図２０の「死後の世界はあると思いますか？」の質問に対して、肯定が５０％から６０％まで増加し小３、小４で６０％台を推移する。否定は男子に多く、女子はわからないが多い。表６は死の普遍性との相関関係を調べたものである。死後の世界と死の普遍性とには相関関係がある。

表６　Q8:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q18:死後の世界はあると思いますか？（横）

質問内容	あると思う		ないと思う		わからない		無回答		合計	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
死ぬ	911	63.7%	213	14.9%	293	20.5%	13	0.9%	1430	90.2%
死なない	27	47.4%	26	45.6%	3	5.3%	1	1.8%	57	3.6%
わからない	40	44.0%	11	12.1%	37	40.7%	3	3.3%	91	5.7%
無回答	2	28.6%	2	28.6%	1	14.3%	2	28.6%	7	0.4%
	980	61.8%	252	15.9%	334	21.1%	19	1.2%	1585	100.0%

④家族と死の話をするか

図２１の「家族の人と『人の死』について話したことがありますか？」の質問に対して、「ある」が３０％から４０％の間を推移し、「ない」は４０％前後を推移する。表７は死の普遍性との相関関係を調べたものである。家族との会話が死の普遍性に対する理解を若干深めていることがわかる。

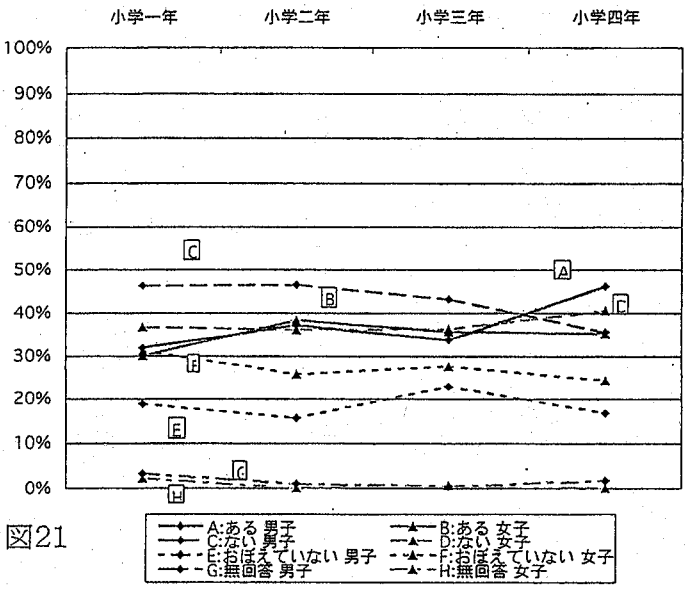

図21

表７　Q8:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q19:家族の人と「人の死」について話をしたことがありますか？（横）

性別	質問内容	ある		ない		おぼえていない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	529	37.0%	568	39.7%	319	22.3%	14	1.0%	1430	90.2%
	死なない	21	36.8%	31	54.4%	5	8.8%	0	0.0%	57	3.6%
	わからない	21	23.1%	36	39.6%	32	35.2%	2	2.2%	91	5.7%
	無回答	3	42.9%	1	14.3%	1	14.3%	2	28.6%	7	0.4%
	男　女	計 574	36.2%	636	40.1%	357	22.5%	18	1.1%	1585	100.0%

（６）メディアの影響について

①平日のテレビ・ビデオの視聴時間

図２２の「テレビ（ビデオをふくむ）をどのくらい見ていますか？」の質問に対して、小１で２５％程度テレビを見ないが小３では５％まで減少する。男子の方が視聴時間が長く、３時間以上は２８％にも達する。

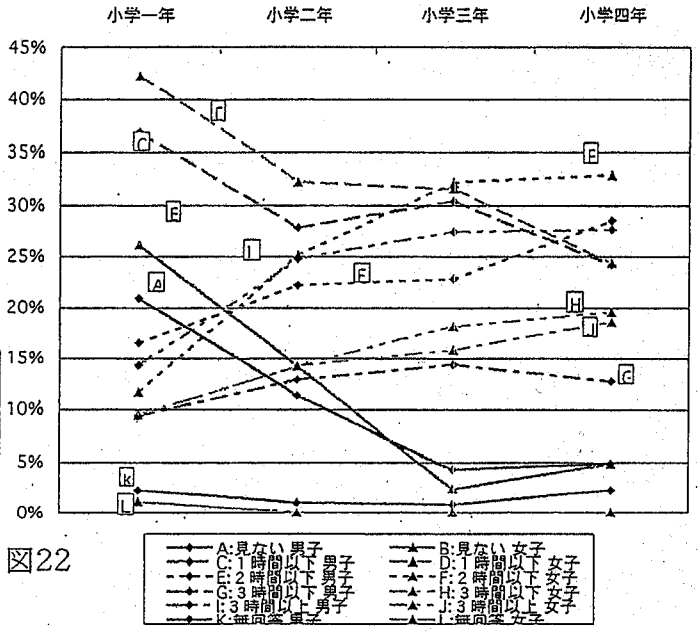

図22

小１からテレビの視聴時間が一貫して長時間化しており、テレビというメディアの影響は甚大である。しかしながら死の普遍性や死の絶対性との相関関係を調べたが明確な関係はなかった。

②平日のゲームをする時間

図２３の「ゲーム（小型ゲーム機やパソコンを使ったゲームをふくむ）をどのくらいしていますか？」の質問に対して、学年が進むにつれ時間が長くなっている。特に小１から小２にかけて長時間化が著しい。また小１から毎日３時間以上する児童が１０％以上存在する。男女差が顕著で、男子はゲームをする時間が長い。表８は死の普遍性との相関関係を調べたものである。ゲームの時間が３時間を超える児童は自分も死すべき存在とする死の普遍性に対する認識が弱くなる傾向がある。表９と表１０は死の絶対性との相関関係を調べたものである。ゲームの時間が３時間を超える児童は人は死んでも生き返れるとみる割合が高い。

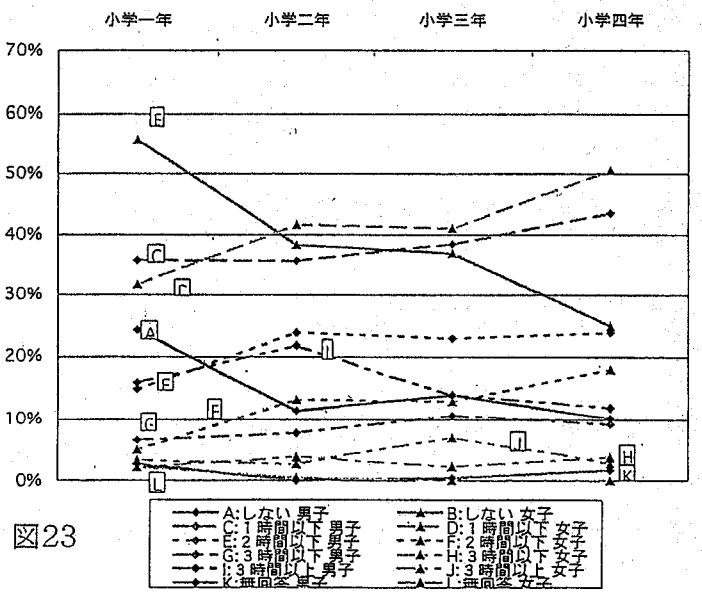

図23

表８　Q10:あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q21:ゲーム(小型ゲーム機やパソコンを使ったゲームをふくむ)をどのくらいしていますか？（横）

	質問内容	しない		1時間以下		2時間以下		3時間以下		3時間以上		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率			件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	327	25.2%	536	41.2%	227	17.5%	78	6.0%	126	9.7%	6	0.5%	1300	82.0%
	死なない	27	25.5%	35	33.0%	21	19.8%	4	3.8%	16	15.1%	3	2.8%	106	6.7%
	わからない	49	30.1%	60	36.8%	24	14.7%	11	6.7%	15	9.2%	4	2.5%	163	10.3%
	無回答	4	25.0%	2	12.5%	2	12.5%	3	18.8%	3	18.8%	2	12.5%	16	1.0%
	男　女	407	25.7%	633	39.9%	274	17.3%	96	6.1%	160	10.1%	15	0.9%	1585	100.0%

表９　Q9:人は死んでも、また生き返れると思いますか（縦）
Q21:ゲーム(小型ゲーム機やパソコンを使ったゲームをふくむ)をどのくらいしていますか？（横）

	質問内容	しない		1時間以下		2時間以下		3時間以下		3時間以上		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率			件数	比率	件数	比率
質問内容	生き返れる	44	28.8%	57	37.3%	19	12.4%	7	4.6%	25	16.3%	1	0.7%	153	9.7%
	生き返れない	329	26.0%	504	39.9%	222	17.6%	75	5.9%	121	9.6%	12	1.0%	1263	79.7%
	わからない	32	20.0%	71	44.4%	32	20.0%	13	8.1%	12	7.5%	0	0.0%	160	10.1%
	無回答	2	22.2%	1	11.1%	1	11.1%	1	11.1%	2	22.2%	2	22.2%	9	0.6%
	男女計	407	25.7%	633	39.9%	274	17.3%	96	6.1%	160	10.1%	15	0.9%	1585	100.0%

表10　Q11:もし自分が死んだとしても生き返れると思いますか？（縦）
Q21:ゲーム(小型ゲーム機やパソコンを使ったゲームをふくむ)をどのくらいしていますか？（横）

性　別	質問内容	しない		1時間以下		2時間以下		3時間以下		3時間以上		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率			件数	比率	件数	比率
質問内容	生き返れる	35	22.7%	64	41.6%	20	13.0%	5	3.2%	29	18.8%	1	0.6%	154	9.7%
	生き返れない	325	26.3%	490	39.6%	217	17.6%	76	6.1%	118	9.5%	10	0.8%	1236	78.0%
	わからない	44	24.2%	75	41.2%	36	19.8%	14	7.7%	12	6.6%	1	0.5%	182	11.5%
	無回答	3	23.1%	4	30.8%	1	7.7%	1	7.7%	1	7.7%	3	23.1%	13	0.8%
	男女計	407	25.7%	633	39.9%	274	17.3%	96	6.1%	160	10.1%	15	0.9%	1585	100.0%

表１０ではゲームの時間が３時間を超える児童は自分は死んでも生き返れるとみる割合が高い。特に小３男子の低学年では「自分が死んでも生き返る」という傾向が顕著にあらわれる。この時期は死の普遍性と絶対性が確立する時期でもあり低学年の長時間のゲーム漬けは問題であろう。このようにゲームは死生観に大きく影響を及ぼしていることがわかる。

③平日のパソコン（ゲーム以外）をする時間

図２４の「パソコン（ゲーム以外の使い方。例：メールやチャット、ホームページ）をどのくらいしていますか？」の質問に対して、「している」児童は２５％から４５％に漸増する。３時間以上する児童は３％程度存在する。男女差はない。表１１は死の絶対性との相関関係を調べたものである。パソコンをする時間が長いと死んでも生き返ると見る割合が高い。②でみた相関関係と同様の結果が出た。

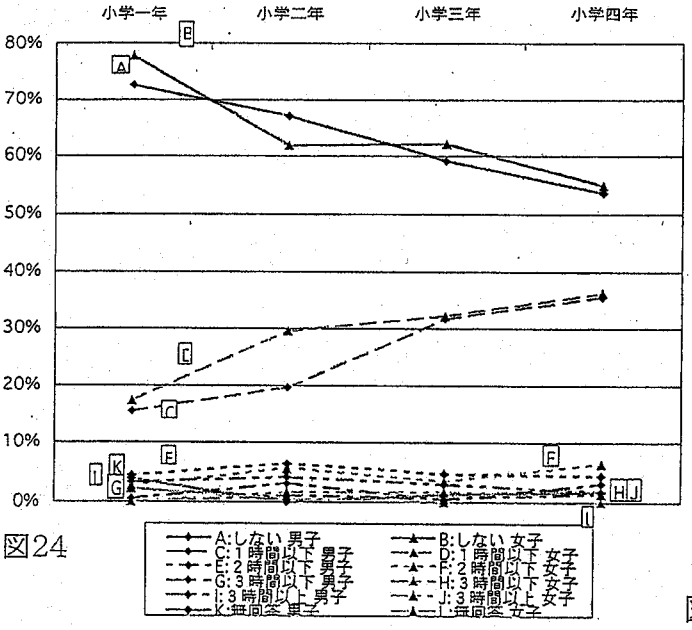

図24

表11　Q11:もし自分が死んだとしても生き返れると思いますか？（縦）
Q21:ゲーム(小型ゲーム機やパソコンを使ったゲームをふくむ)をどのくらいしていますか？（横）

	質問内容	しない		1時間以下		2時間以下		3時間以下		3時間以上		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率			件数	比	件数	比率
質問内容	生き返れる	35	22.7%	64	41.6%	20	13.0%	5	3.2%	29	18.8%	1	0	154	9.7%
	生き返れない	325	26.3%	490	39.6%	217	17.6%	76	6.1%	118	9.5%	10	0	1236	78.0%
	わからない	44	24.2%	75	41.2%	36	19.8%	14	7.7%	12	6.6%	1	0	182	11.5%
	無回答	3	23.1%	4	30.8%	1	7.7%	1	7.7%	1	7.7%	3	23	13	0.8%
	男　女	407	25.7%	633	39.9%	274	17.3%	96	6.1%	160	10.1%	15	0	1585	100.0%

（７）自己肯定感について

図２５の「自分のことが好きですか？」の質問に対して、強い自己肯定感は漸減し、小４で３割を割り込む。「きらい」（自己肯定感のない児童）は一貫して１０％存在する。

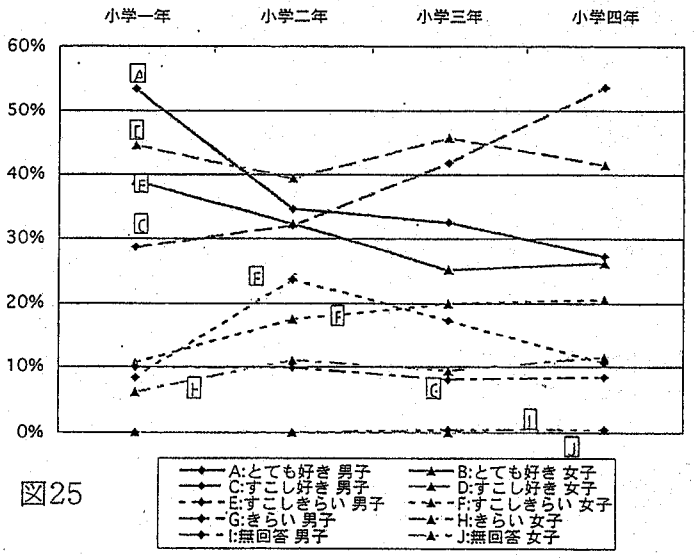

図25

（８）家族との関係

図２６の「自分の誕生日を家族の人におぼえても

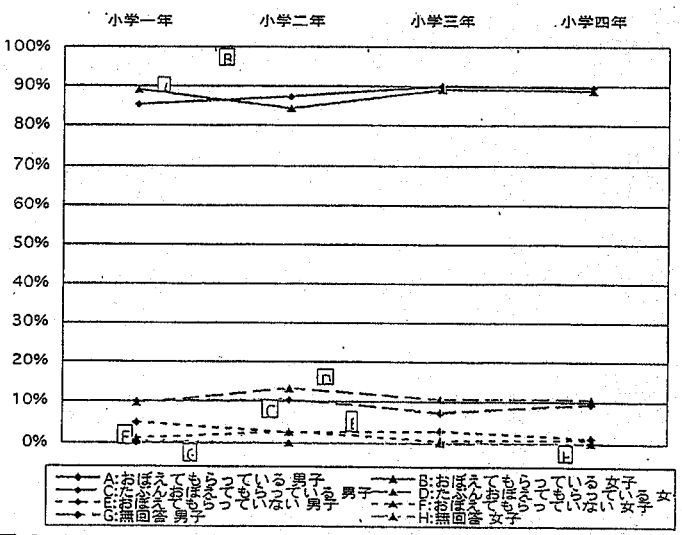

図２６

らっていますか？」の質問に、「おぼえてもらっている」が９０％弱で推移する。「おぼえてもらっていない」は２％程度存在する。表１２は死の普遍性との相関関係を調べたものである。家族に大切にされていない児童は死の普遍性に対する認識が弱い。

表12 Q8:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q24:自分の誕生日を家族の人におぼえてもらっていますか？（横）

	質問内容	おぼえてもらっていい		ぶんおぼえてもらっ		おぼえてもらっていな		無回	合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	件数	比率
質問内容	死ぬ	1263	88.3%	139	9.7%	27	1.9%	1	1430	90.2%
	死なない	47	82.5%	5	8.8%	5	8.8%	0	57	3.6%
	わからない	76	83.5%	13	14.3%	2	2.2%	0	91	5.7%
	無回答	7	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	7	0.4%
	男 女	計 1393	87.9%	157	9.9%	34	2.1%	1	1585	100.0%

（９）自然体験などの生育歴

図２７は「いままでどのようにすごしましたか？」（複数選択可）の質問に対して、自然体験がテレビやゲームなどの体験より少ない傾向がわかる。地域の活動や、家の手伝いは低い数字ではない。死の普遍性と絶対性の相関関係を調べたところ、テレビやゲームの体験が多い集団は自然体験の多い集団に比べ死の普遍性や絶対性対する認識が弱い。

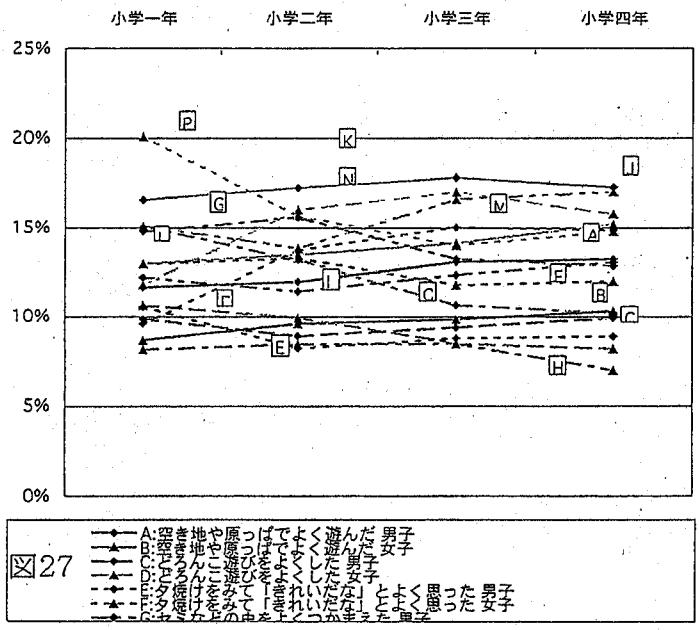

図27

アンケートB

（１）死の普遍性と絶対性について

①人の死の認識について

図２８の「人はいつか死ぬと思いますか？」の質問に対して、アンケートA（小低学年とデータ）と整合性がある。（「たぶん死ぬ」と含みを残した回答を入れると９割を越す）「死なない」は２％程度存在する。

②人の死の絶対性について

図２９の「人は死んでも生き返れると思いますか？」

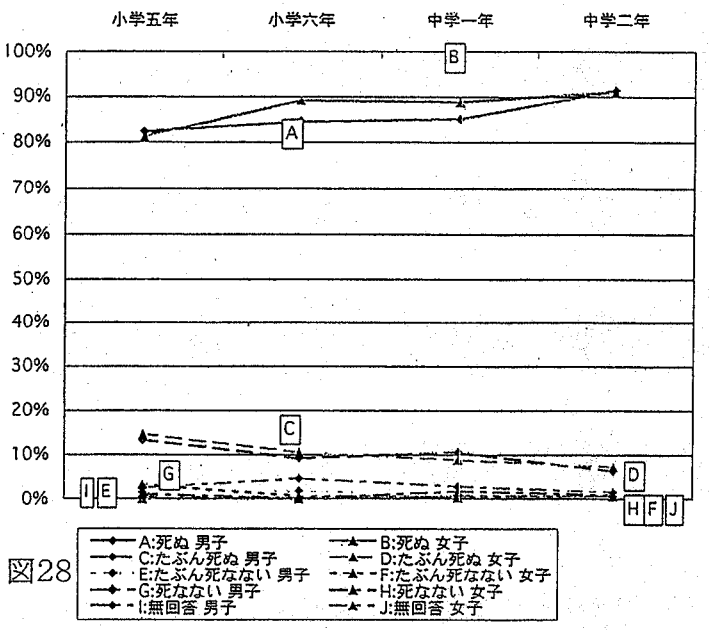

図28

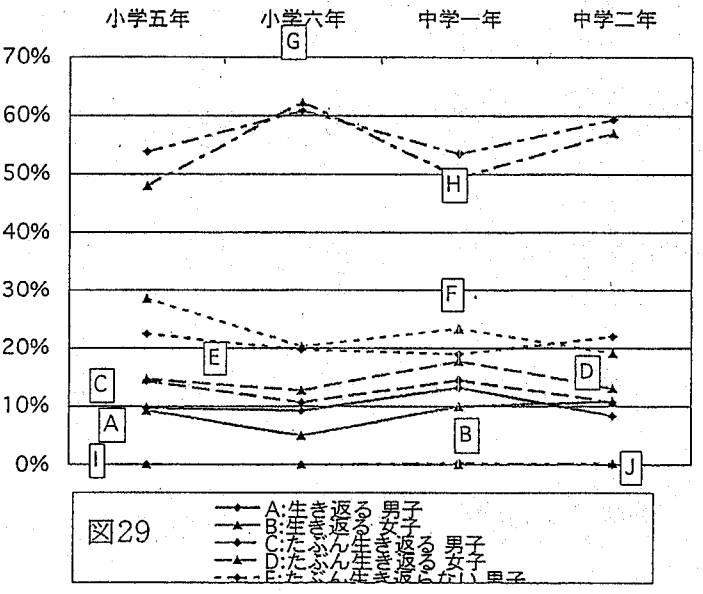

図29

の質問に対して、「生き返る」が１０％で推移する。「たぶん生き返る」は１３％前後で推移する。長崎県教委が発表したデータ（１５％）（長崎県教育委員会 学校教育課「児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査」17 年 01 月 24 日）と比較すると、「生き返る」数値が多いのは「たぶん生き返る」と選択肢を細分化したためと考えられる。ほぼ長崎県教委のデータと矛盾しない結果となった。ただ長崎県と違って中学生になると生き返ると答える数値が上がる傾向はみられなかった。生き返らない数値は７０％台で推移している。

また日本女子大学教授中村博志の研究（http://momi.jwu.ac.jp/jidou/nakamura/kyouiku_9.html）では「一度死んだ人が生きかえることがあると思うか」の問いに対して、「ある」との答えが(33.9%)、「ない」が(33.9%)、分からないが(31.5%)であった。選択肢などアンケート方法が異なるため一概に比較はできないものの相当の比率で生き

返ると考えていることは確かである。とにかく２０％以上の児童生徒が生き返ると答えていることに注目したい。それが年齢とともに減少していないのである。

③自分の死の認識について

図３０の「あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？」の質問に対して、小５のデータを見るとアンケートAの小４データと整合性がある。（「死ぬ」、「たぶん死ぬ」をあわせて９０％を超える）小５で「たぶん死ぬ」が多く、揺らいでいるが、その後漸減する。「死なない」、「たぶん死なない」はそれぞれ２％前後で推移する。死なないは男子が女子に比べて多い。

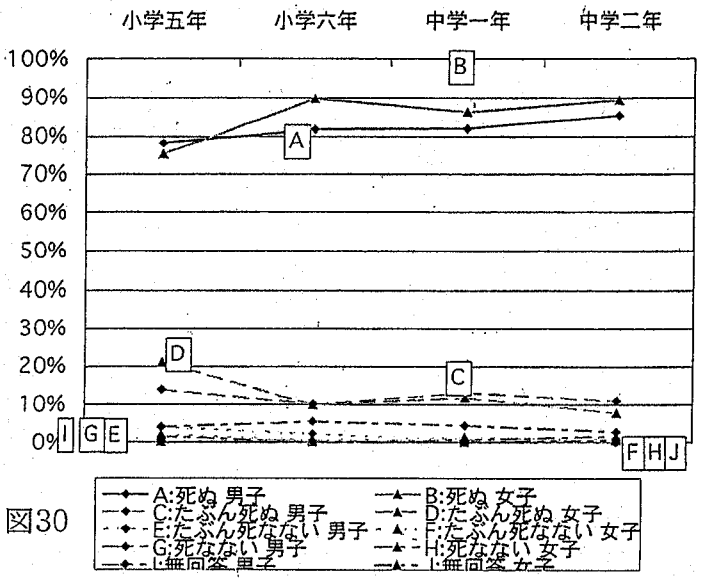

図30

④自分の死の絶対性の認識について

図３１の「もし自分が死んだとしても生き返れると思いますか？」の質問に対して、「生き返える」は１０％程度で推移する。「たぶん生き返える」は１０％強で推移する。両者を合わせると２０％で推移する。

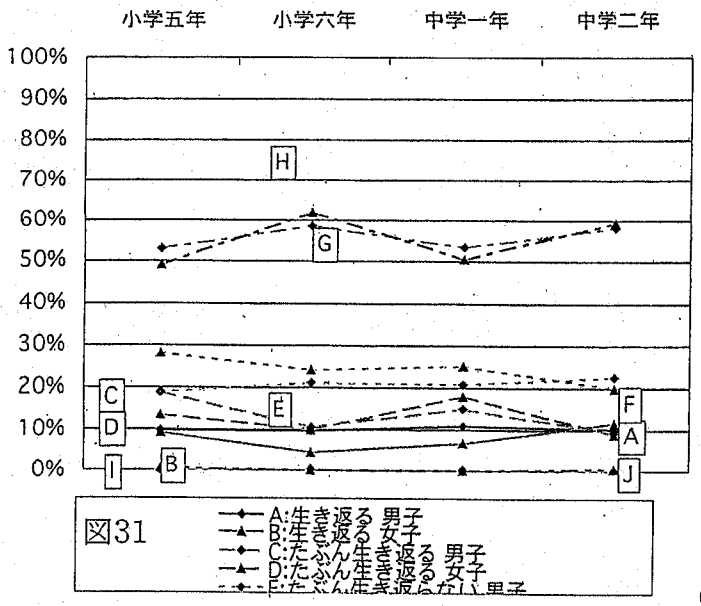

図31

⑤父母の死の認識について

図３２の「あなたのお父さんとお母さんはいつか死ぬと思いますか？」の質問に対して、「死ぬ」、「たぶん死ぬ」とあわせて９０％以上で推移する。

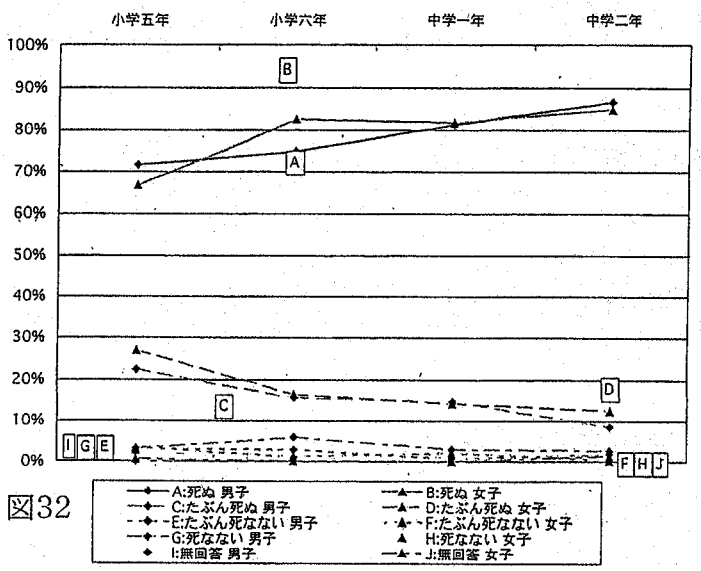

図32

⑥父母の死の絶対性の認識について

図３３の「もしあなたのお父さんやお母さんが死んだとしても生き返れると思いますか？」の質問に対して、「生き返る」が１０％弱、「たぶん生き返る」が１０％強で推移する。これは④の結果とほぼ同じである。

またアンケートAのデータと整合性がある。

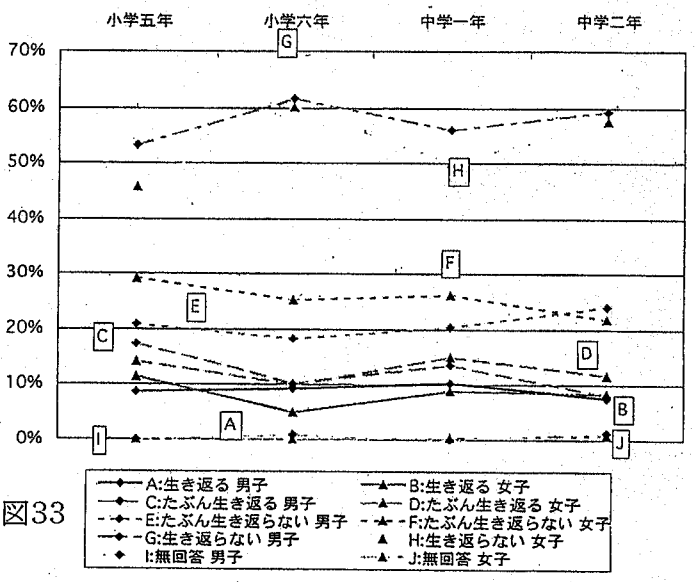

図33

（２）死のイメージ

ほぼ予想されたイメージをもっている。「終わり」が漸増、「悲しみ」が漸減、「不思議」が漸増、「恐怖」が漸減する。「終わり」と答える男子の比率が高いほかは男女差はない。

（３）自殺・他殺について

①死にたいと思ったこと

図３４の「これまでに死にたいと思ったことはあり

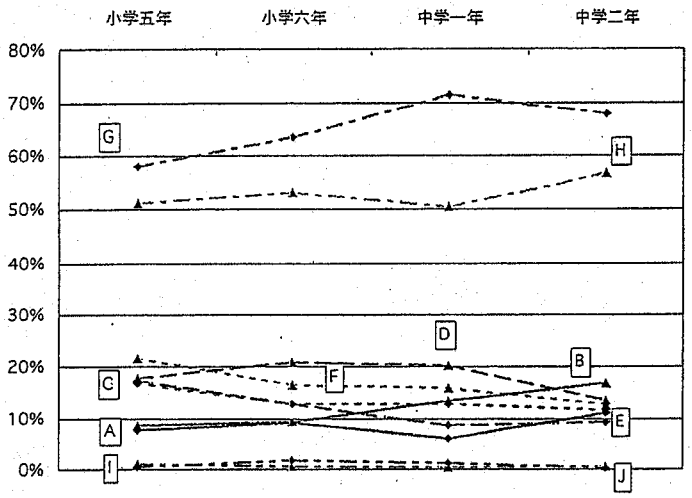

図34

ますか？」の質問に対して、「思ったことはない」は男子の比率が高く、５０％から６０％へ漸増する。死にたいと思ったことは漸減するが、４、５回以上ある児童・生徒は学年が上昇するほど増える傾向にある。４、５回以上ある生徒が１０％前後存在することに注目したい。

②死にたい理由

図３５の「死にたいと思った理由はなんですか？」の質問に対して、友人関係に悩む女子の現状がデータに出ている。男子の理由は親や家庭、勉強、進路である。

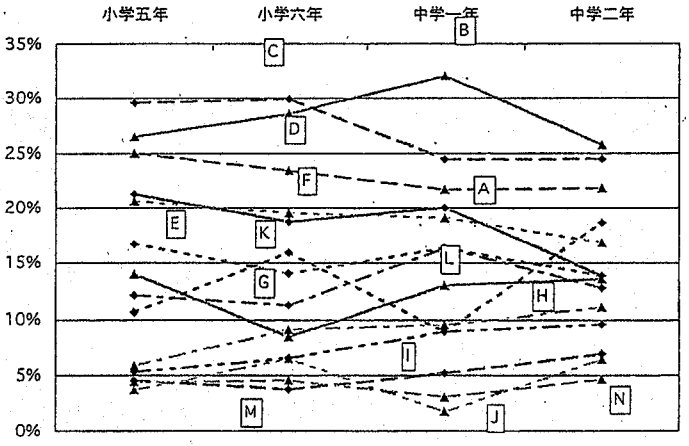

図35

③どのように克服したか

図３６の「死にたいと思ったとき、どのようにのりこえましたか？」の質問に対して、「友人に相談した」が５％あるほかは相談する比率は低く、自分自身で対処しようとしていることが分かる。何かに頑張った昇華型は１０％程度である。男子は「いつの間にか忘れる」が多く、女子は「泣く」が多い。自傷行為をする児童生徒は５％弱存在することに注目したい。

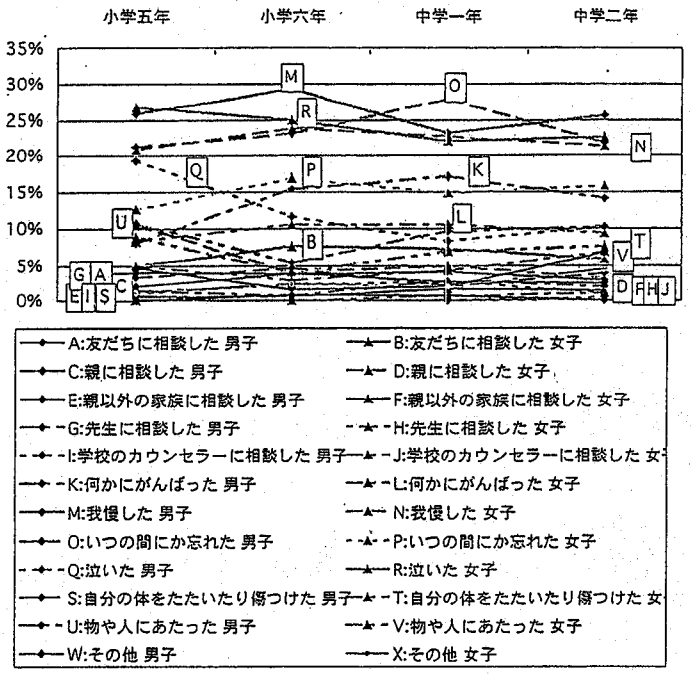

図36

④自殺に対する共感度

図３７の「自殺や殺人について聞きます。どんなことがあっても自殺はよくないと思いますか？」の質問に対して、「とてもそう思う」が８０％弱から６０％に漸減する。「少しそう思う」は１４％から２５％に漸増する。男子に比べ女子は中２で、「とてもそう思う」が減った分、「すこしそう思う」が増えている。「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」を合わせた値は６％から１２％に漸増する。中２で１２％の生徒が「どんなことがあっても自殺はよくない」と思っていないことに注目したい。

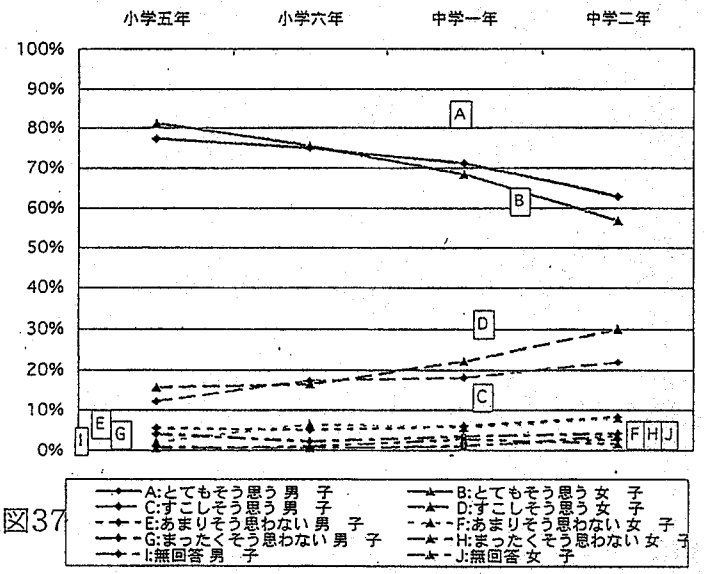

図37

表１３は死の普遍性との相関関係を調べたものである。自殺を容認する集団は死の普遍性に対する認識が弱い。

表13 Q4:あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q12:自殺や殺人についてききます。あなたは次のことについて、どう思いますか？（横）
(1)どんなことがあっても自殺はよくない。（横）

	質問内容	とてもそう思う		すこしそう思う		あまりそう思わ		ったくそう思わ		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	1237	68.3%	373	20.6%	120	6.6%	51	2.8%	30	1.7%	1811	84.1%
	たぶん死ぬ	184	73.0%	53	21.0%	8	3.2%	4	1.6%	3	1.2%	252	11.7%
	たぶん死なない	17	54.8%	6	19.4%	6	19.4%	1	3.2%	1	3.2%	31	1.4%
	死なない	40	71.4%	9	16.1%	3	5.4%	4	7.1%	0	0.0%	56	2.6%
	無回答	2	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	33.3%	3	0.1%
	男 女 計	1480	68.7%	441	20.5%	137	6.4%	60	2.8%	35	1.6%	2153	100.0%

⑤殺人に対する倫理観

図３８の「自殺や殺人について聞きます。どんなことがあっても殺人はよくないと思いますか？」の質問に対して、「とてもそう思う」は中１、中２で微減する。その分「少しそう思う」が増加する。数は少ないが「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」は微増する。（男子の比率が高い）中２で殺人を否定しない割合が５％存在することに注目したい。

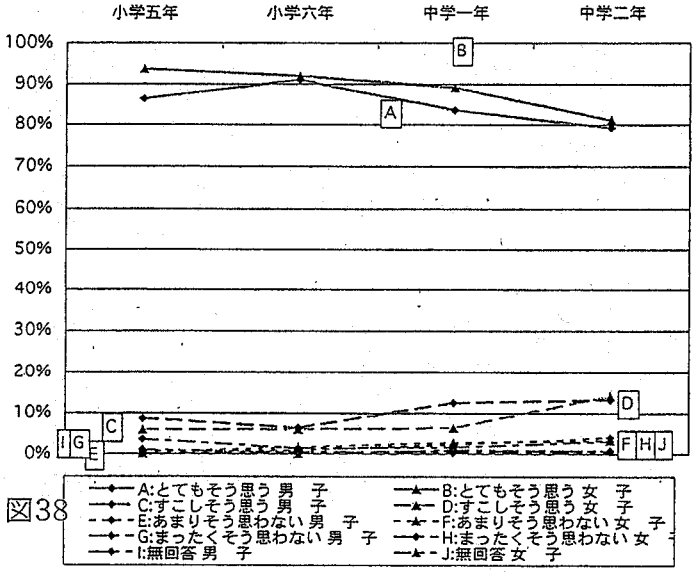

図38

表１４は死の普遍性との相関関係を調べたものである。殺人を否定しない集団は死の普遍性に対する認識が弱い。

表14 Q4:あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q12:自殺や殺人についてききます。あなたは次のことについて、どう思いますか？
(2) どんなことがあっても殺人はよくない。（横）

	質問内容	とてもそう思う		すこしそう思う		あまりそう思わ		ったくそう思わ		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	1551	85.6%	183	10.1%	43	2.4%	25	1.4%	9	0.5%	1811	84.1%
	たぶん死ぬ	214	84.9%	28	11.1%	4	1.6%	4	1.6%	2	0.8%	252	11.7%
	たぶん死なない	25	80.6%	4	12.9%	2	6.5%	0	0.0%	0	0.0%	31	1.4%
	死なない	48	85.7%	2	3.6%	2	3.6%	4	7.1%	0	0.0%	56	2.6%
	無回答	2	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	33.3%	3	0.1%
	男 女 計	1840	85.5%	217	10.1%	51	2.4%	33	1.5%	12	0.6%	2153	100.0%

⑥死への興味

図３９の「次のことについてどう思いますか？人の死について考えることがありますか？」の質問に対して、「考えることがある」と答えている値は６０％から７０％で漸増する。女子の方が死を考える指向がや

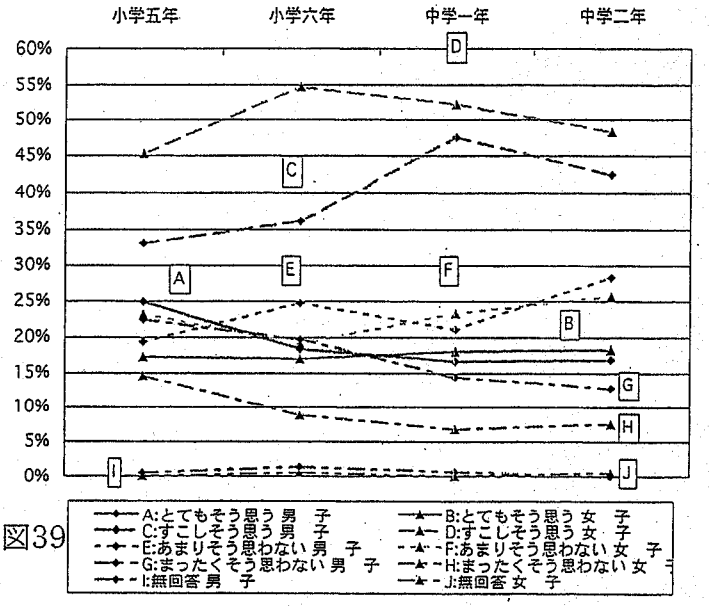

図39

や強い。

⑦死に対する恐怖心

図４０の「次のことについてどう思いますか？死ぬことはこわいですか？」の質問に対して、「とてもそう思う」は６０％から４０％に減少し、女子に比率が高い。「少しそう思う」は２５％から３５％に増加する。「とてもそう思う」と「少し」を合わせた値でも８８から７８％と漸減する。「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」を合わせた数字は１１％から２１％へ漸増（男子の比率が高い）する。

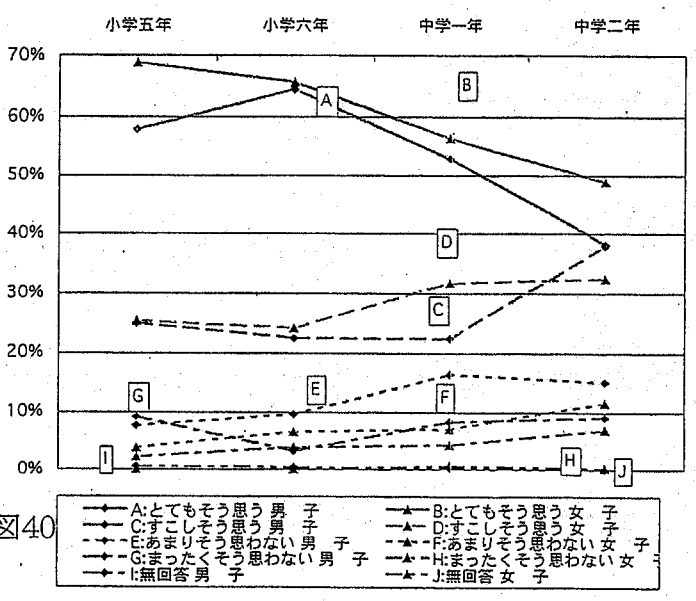

図40

表１５は死の普遍性との相関関係を調べたものであ

表15 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q13:次のことについてどう思いますか？
死ぬことはこわい。（横）

	質問内容	とてもそう思う		すこしそう思う		あまりそう思わ		ったくそう思わ		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	990	52.6%	561	29.8%	210	11.2%	116	6.2%	5	0.3%	1882	87.4%
	たぶん死ぬ	127	63.5%	50	25.0%	17	8.5%	6	3.0%	0	0.0%	200	9.3%
	たぶん死なない	14	60.9%	4	17.4%	2	8.7%	3	13.0%	0	0.0%	23	1.1%
	死なない	24	60.0%	6	15.0%	0	0.0%	10	25.0%	0	0.0%	40	1.9%
	無回答	4	50.0%	2	25.0%	1	12.5%	0	0.0%	1	12.5%	8	0.4%
	男女計	1159	53.8%	623	28.9%	230	10.7%	135	6.3%	6	0.3%	2153	100.0%

る。死に対する恐怖心が小さい集団は死の普遍性に対する認識が弱い。

⑧死後の世界

図４１の「死後の世界はあると思うか？」の質問に対して、「とてもそう思う」、「少しそう思う」をあわせた値は７０％から６０％へ漸減する。信じる割合はやや女子が高い。

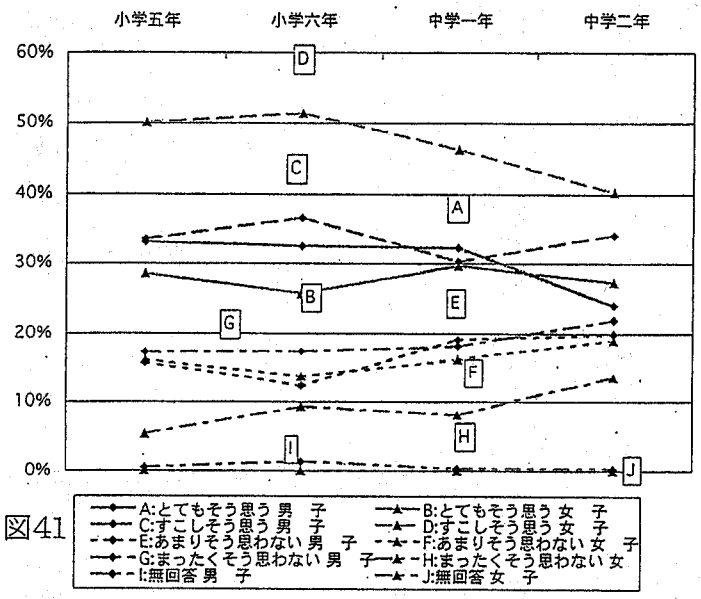

図41

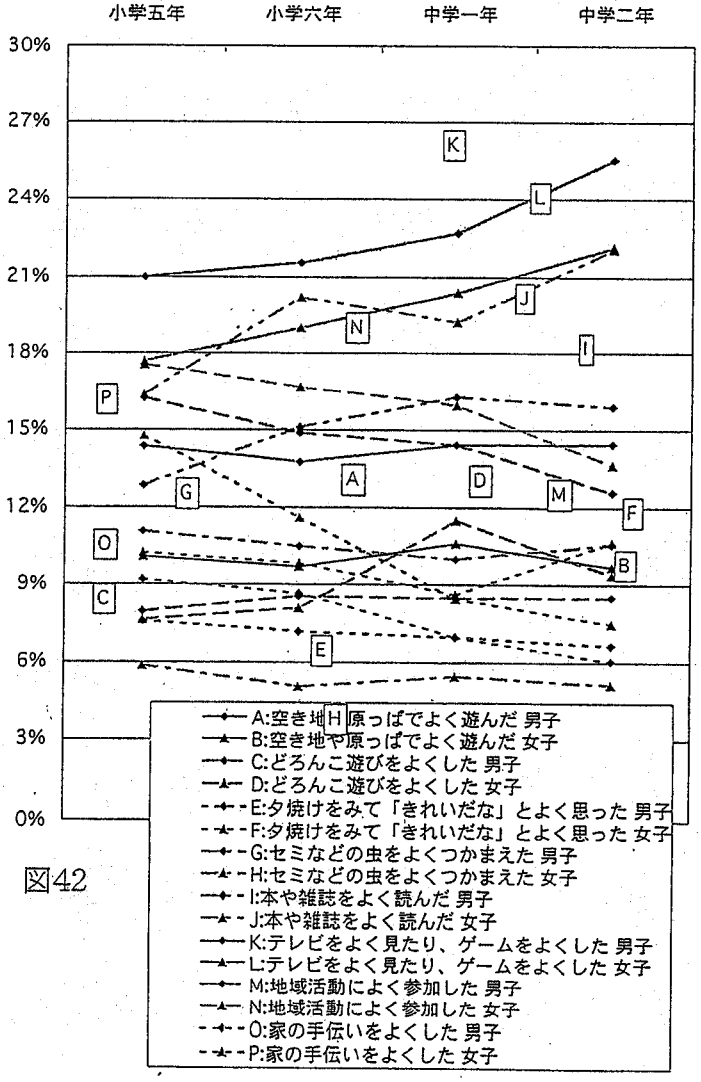

図42

（４）生育歴について

①これまでの過ごし方

図４２の「どのように過ごしましたか？」の質問に対して、テレビゲームなどの体験に比べてやはり自然体験は少なく、半分にも満たない。低学年の方が地域活動に参加している。学年があがるにつれて家の手伝いはしていない（自然体験よりも低い比率）。

（５）ペットの飼育と死生観

①飼育経験

図４３の「家でペットを飼育したことがありますか？」の質問に対して、７０％から８０％で推移する。アンケートAと整合性がある。

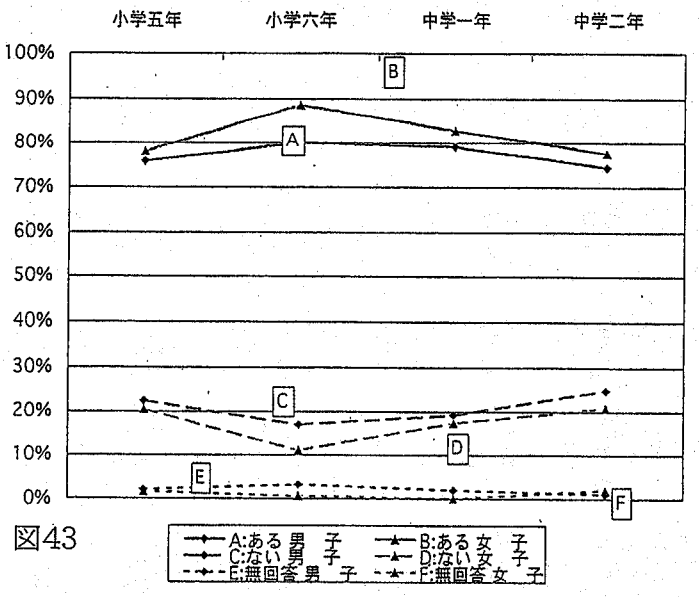

図43

②ペットの死の体験

図４４の「自分の世話をしていたペットが死んでしまったことがありますか？」の質問に対して、飼育体験者の約８割弱が体験がある。表１６は死の普遍性との相関関係を調べたものである。ペットの死を体験し

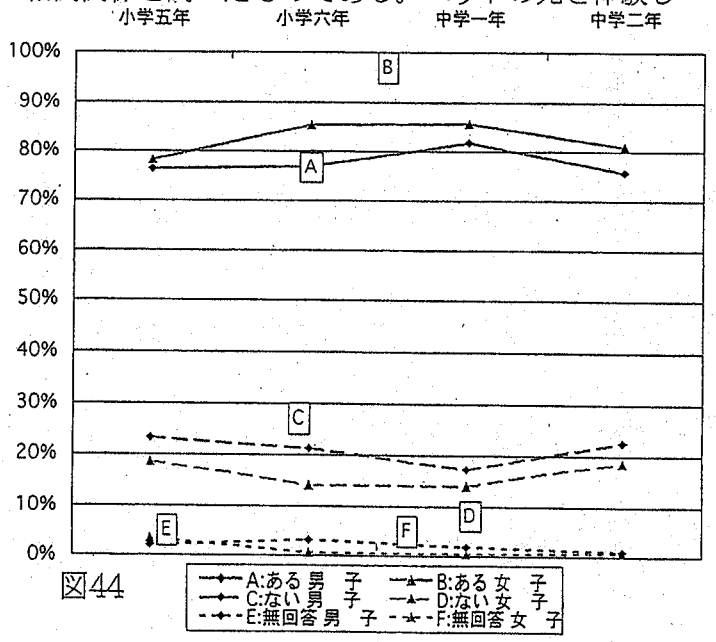

図44

ていない集団は死の普遍性に対する認識が弱い。

表16 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q15:家でペットを飼育したことがありますか？
(1)自分の世話をしていたペットが死んでしまったことがありますか？（横）

	質問内容	ある		ない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	1202	79.9%	283	18.8%	20	1.3%	1505	87.9%
	たぶん死ぬ	128	83.7%	23	15.0%	2	1.3%	153	8.9%
	たぶん死なない	11	61.1%	7	38.9%	0	0.0%	18	1.1%
	死なない	23	74.2%	7	22.6%	1	3.2%	31	1.8%
	無回答	4	80.0%	1	20.0%	0	0.0%	5	0.3%
	男女計	1368	79.9%	321	18.8%	23	1.3%	1712	100.0%

③ペットの死に対する対処

図４５の「死んだペットをどうしましたか？」の質

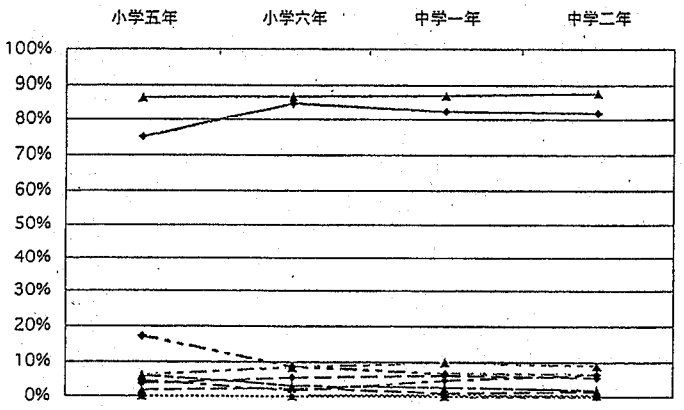

図45
A:お墓を作ってお別れした 男　子
B:お墓を作ってお別れした 女
C:すてた 男　子
D:すてた 女　子
E:だれかがかたづけた 男　子
F:だれかがかたづけた 女　子
G:忘れた 男　子
H:忘れた 女　子
I:その他 男　子
J:その他 女　子
K:無回答 男　子
L:無回答 女　子

問に対して、８５％がお墓を作っており、女子にその割合が多い。「捨てた」は３％存在し、男子に多い。表１７は死の普遍性との相関関係を調べたものである。ペットを捨てたと答えた集団は死の普遍性に対する認識が弱い。

（５）葬儀や墓参経験について

表17 Q4:あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q15:家でペットを飼育したことがありますか？
(2) 死んだペットをどうしましたか？（横）

	質問内容	お墓を作ってお別れした		すてた		だれかがかたづけた		忘れた		その他		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	929	84.0%	39	3.5%	0	0.0%	38	3.4%	99	9.0%	1	0.1%	1106	84.9%
	たぶん死ぬ	126	87.5%	1	0.7%	0	0.0%	8	5.6%	8	5.6%	1	0.7%	144	11.1%
	たぶん死なない	18	90.0%	1	5.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	5.0%	0	0.0%	20	1.5%
	死なない	19	63.3%	3	10.0%	0	0.0%	3	10.0%	5	16.7%	0	0.0%	30	2.3%
	無回答	2	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%
	男女計	1094	84.0%	44	3.4%	0	0.0%	49	3.8%	113	8.7%	2	0.2%	1302	100.0%

①葬儀の経験

図４６の「お葬式に参加したことはありますか？」の質問に対して、参加した割合は７５％で推移する。

表１８は死の普遍性との相関関係を調べたものである。葬儀に参加したことのない集団はやや死の普遍性に対する認識が弱い。

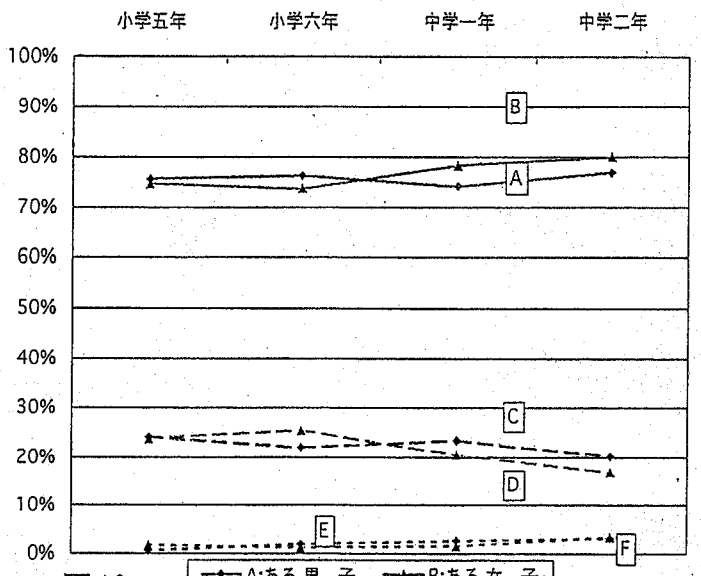

図46
A:ある 男　子
B:ある 女　子
C:ない 男　子
D:ない 女　子
E:無回答 男　子
F:無回答 女　子

表18 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q16:お葬式に参加したことがありますか？（横）

	質問内容	ある		ない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	1455	77.3%	390	20.7%	37	2.0%	1882	87.4%
	たぶん死ぬ	145	72.5%	47	23.5%	8	4.0%	200	9.3%
	たぶん死なない	16	69.6%	7	30.4%	0	0.0%	23	1.1%
	死なない	29	72.5%	11	27.5%	0	0.0%	40	1.9%
	無回答	5	62.5%	2	25.0%	1	12.5%	8	0.4%
	男女計	1650	76.6%	457	21.2%	46	2.1%	2153	100.0%

②墓参の経験

図４７の「お墓参りに行ったことがありますか？」の質問に対して、６０％以上が年１回行っている。「１回も経験がない」は２％程度である。表１９は死の普遍性との相関関係を調べたものである。墓参の経験のない集団は死の普遍性に対する認識がやや弱い。

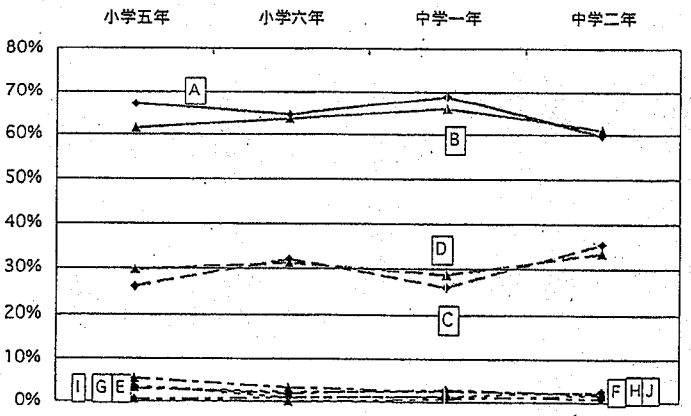

図47
A:１年に１回以上は行っている 男子
B:１年に１回以上は行っている 女
C:行ったことがある 男子
D:行ったことがある 女子
E:１回も行ったことがない 男子
F:１回も行ったことがない 女子
G:おぼえていない 男子
H:おぼえていない 女子
I:無回答 男子
J:無回答 女子

（６）家族との関係について

①家族との温かい関係

図４８の「自分の誕生日を家族の人に覚えてもらっ

表19 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q17:お墓参りに行ったことがありますか？（横）

	質問内容	1年に1回以上行っている		行ったことがある		1回も行ったことがない		おぼえていない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	1206	64.1%	574	30.5%	42	2.2%	46	2.4%	14	0.7%	1882	87.4%
	たぶん死ぬ	126	63.0%	63	31.5%	3	1.5%	5	2.5%	3	1.5%	200	9.3%
	たぶん死なない	11	47.8%	8	34.8%	1	4.3%	3	13.0%	0	0.0%	23	1.1%
	死なない	24	60.0%	11	27.5%	1	2.5%	3	7.5%	1	2.5%	40	1.9%
	無回答	4	50.0%	2	25.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	12.5%	8	0.4%
	男女計	1371	63.7%	658	30.6%	47	2.2%	58	2.7%	19	0.9%	2153	100.0%

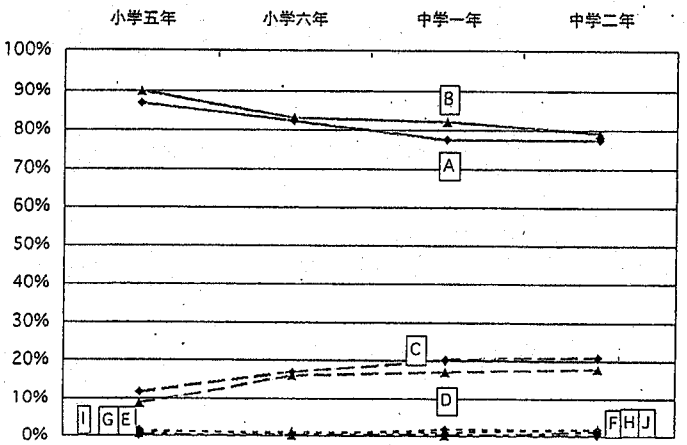

図48
A:おぼえてもらっている 男子
B:おぼえてもらっている 女子
C:たぶんおぼえてもらっている 男子
D:たぶんおぼえてもらっている 女
E:おぼえてもらっていない 男子
F:おぼえてもらっていない 女子
G:無回答 男子
H:無回答 女子

ていますか？」の質問に対して、「覚えてもらっている」が９０％弱から８０％弱へ漸減し、その分、「たぶん」が漸増する。「覚えてもらっていない」は２％弱存在する。死の普遍性との相関関係を調べたところ、覚えてもらっていない集団はやや死の普遍性に対する認識が弱い。

②家族に愛されている

図４９の「自分が保護者（親）に愛されていると思いますか？」の質問に対して、「とてもそう思う」は５０％から４０％に漸減し、その分、「少しそう思う」

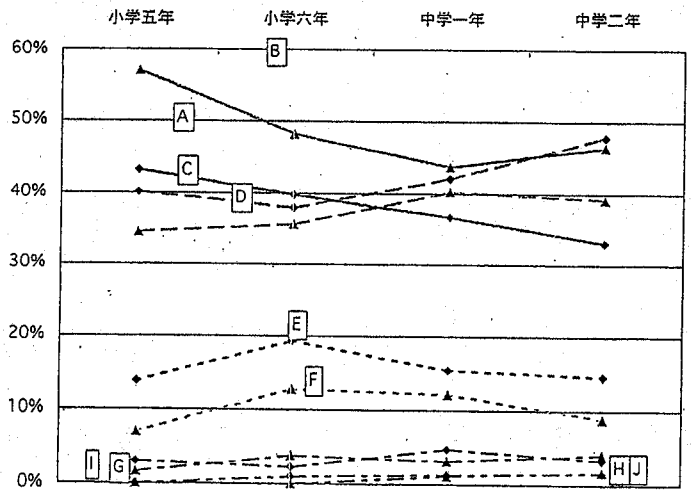

図49
A:とてもそう思う 男子
B:とてもそう思う 女子
C:すこしそう思う 男子
D:すこしそう思う 女子
E:あまりそう思わない 男子
F:あまりそう思わない 女子
G:まったくそう思わない 男子
H:まったくそう思わない 女子
I:無回答 男子
J:無回答 女子

が３７％から４４％に微増する。女子の方が愛されていると思っている。「あまり愛されていない」と思っている割合は１０％強で推移し、男子にやや多い。「まったく愛されていない」と思っている割合は３％程度で推移する。

表２０は死の普遍性との相関関係を調べたものである。家族に愛されていない集団は死の普遍性に対する認識が弱い。これは①の結果と同じである。

表20 Q4:あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q19:自分が保護者(親)に愛されていると思いますか？（横）

	質問内容	とてもそう思う		すこしそう思う		あまりそう思わない		まったくそうわない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	779	43.0%	733	40.5%	219	12.1%	64	3.5%	16	0.9%	1811	84.1%
	たぶん死ぬ	95	37.7%	111	44.0%	34	13.5%	8	3.2%	4	1.6%	252	11.7%
	たぶん死なない	11	35.5%	12	38.7%	7	22.6%	0	0.0%	1	3.2%	31	1.4%
	死なない	21	37.5%	14	25.0%	17	30.4%	4	7.1%	0	0.0%	56	2.6%
	無回答	2	66.7%	1	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.1%
	男女計	908	42.2%	871	40.5%	277	12.9%	76	3.5%	21	1.0%	2153	100.0%

③家族と死の話をするか

図５０の「家族の人と「人の死」について話したことがありますか？」の質問に、「よく話している」は４％で推移する。「ときどき」は２０％強で推移する。「あまり話したことはない」、「まったく話したことはない」を合わせた値は７０％で推移する。表２１は死の普遍性との相関関係を調べたものである。まったく話をしたことのない集団はやや死の普遍性に対する認識が弱い。

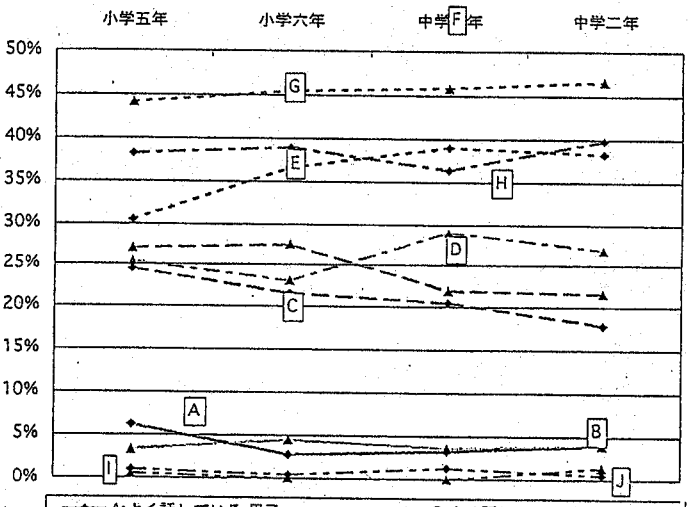

図50
A:よく話している 男子
B:よく話している 女子
C:ときどき話している 男子
D:ときどき話している 女子
E:あまり話をしたことがない 男子
F:あまり話をしたことがない 女子
G:まったく話をしたことがない 男子
H:まったく話をしたことがない 女
I:無回答 男子
J:無回答 女子

表21 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q20:あなたは家族の人と「人の死」について話をしたことがありますか？（横）

	質問内容	よく話している		ときどき話している		あまり話をしたことがない		まったく話をしたことがない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	73	3.9%	417	22.2%	775	41.2%	605	32.1%	12	0.6%	1882	87.4%
	たぶん死ぬ	5	2.5%	36	18.0%	92	46.0%	65	32.5%	2	1.0%	200	9.3%
	たぶん死なない	2	8.7%	5	21.7%	9	39.1%	7	30.4%	0	0.0%	23	1.1%
	死なない	1	2.5%	8	20.0%	10	25.0%	21	52.5%	0	0.0%	40	1.9%
	無回答	0	0.0%	3	37.5%	2	25.0%	2	25.0%	1	12.5%	8	0.4%
	男女計	81	3.8%	469	21.8%	888	41.2%	700	32.5%	15	0.7%	2153	100.0%

（7）自己肯定感

図５１の「自分自身が好きだ」という質問に対して、自己肯定感は学年があがるに従って低下する。「とてもそう思う」は２２％から８％まで漸減する。女子の自己肯定感は男子に比べ低く、その率は学年が進行するほど顕著になる。中２の女子では自己肯定感のない比率は７０％を超える。

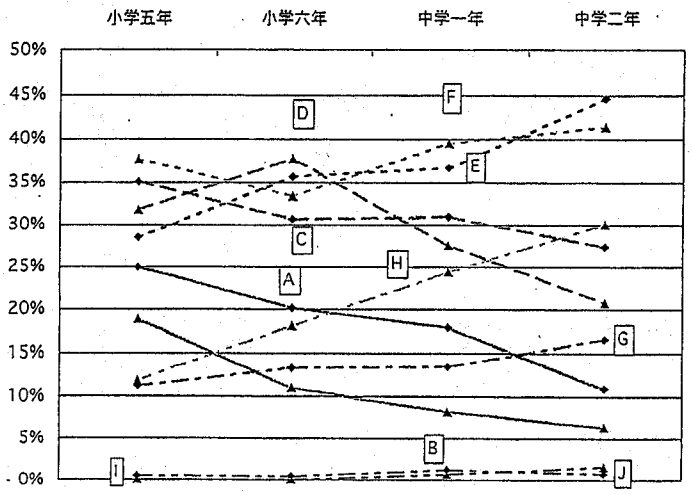

図51

表２２は「死にたいと思ったこと」との相関関係を調べたものである。自己肯定感と強い相関関係がある。

表22 Q9:これまでに死にたいと思ったことはありますか？（縦）
Q21:自分自身が好きだ。（横）

	質問内容	とてもそう思う		すこしそう思う		あまりそう思わない		まったくそう思わない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	4，5回以ある	19	8.2%	28	12.0%	79	33.9%	104	44.6%	3	1.3%	233	10.8%
	2，3回ある	27	8.9%	73	24.2%	121	40.1%	79	26.2%	2	0.7%	302	14.0%
	1回ある	33	10.6%	91	29.3%	130	41.8%	54	17.4%	3	1.0%	311	14.4%
	思ったことはない	212	16.4%	433	33.5%	483	37.4%	156	12.1%	7	0.5%	1291	60.0%
	無回答	2	12.5%	2	12.5%	8	50.0%	2	12.5%	2	12.5%	16	0.7%
	男 女 計	293	13.6%	627	29.1%	821	38.1%	395	18.3%	17	0.8%	2153	100.0%

（8）死んでいなくなればいいと思ったこと

図５２の「今までに人とけんかしたり、嫌がらせをされたり、腹が立つことがあったとき『死んでいなくなればいいのに』と思ったことがありますか？」の質問に対して、「５、６回以上ある」は１５％から２５％に漸増する。「ない」と答える割合は３割である。

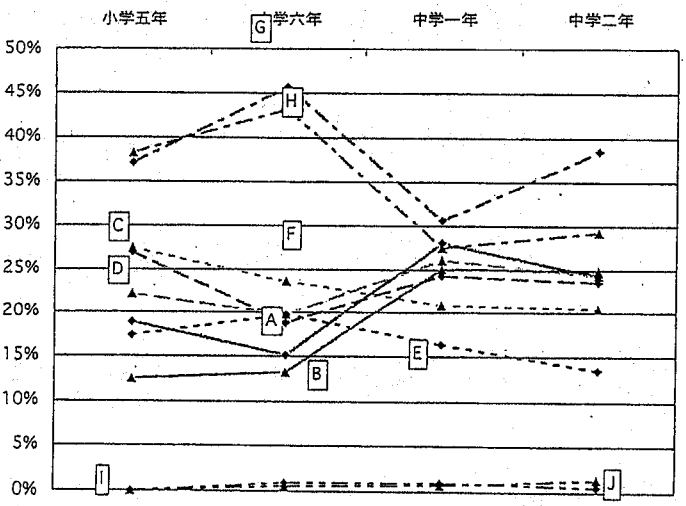

図52

（9）「死ね」、「殺すぞ」という言葉の使用について

①使用頻度

図５３の「友だち同士で話をしている中で『死ね』とか『殺す』という言葉を使ったり、使われたりする事がありますか？」の質問に対して、「毎日…」が中学で急増（５％→２０％弱、男子に多い）する。「ない」は小５で４割弱しかなく、学年が上がるごとに減少する。表２３は死の普遍性との相関関係を調べたものである。「毎日使ったり、使われたりする」集団は死の普遍性に対する認識が弱い。

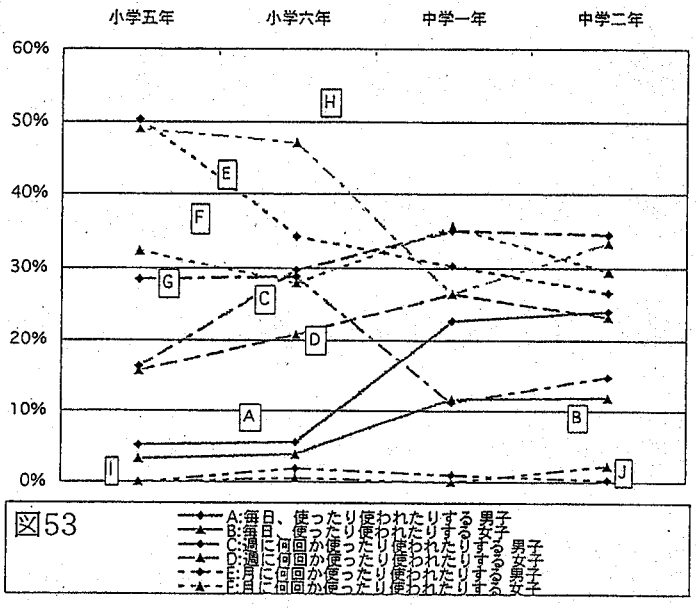

図53

表23 Q4:あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q23:友達同士で話をしている中で「死ね」とか「殺す」という言葉を使ったり、使われたりすることがありますか？（横）

	質問内容	毎日、使ったり使われたりする		週に何回か使ったり使われたりする		月に何回か使ったり使われたりする		使ったり使われたりしない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	229	12.6%	495	27.3%	582	32.1%	492	27.2%	13	0.7%	1811	84.1%
	たぶん死ぬ	28	11.1%	53	21.0%	89	35.3%	78	31.0%	4	1.6%	252	11.7%
	たぶん死なない	5	16.1%	7	22.6%	11	35.5%	8	25.8%	0	0.0%	31	1.4%
	死なない	14	25.0%	15	26.8%	13	23.2%	13	23.2%	1	1.8%	56	2.6%
	無回答	1	33.3%	1	33.3%	1	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.1%
	男 女 計	277	12.9%	571	26.5%	696	32.3%	591	27.5%	18	0.8%	2153	100.0%

②言葉に対する感覚

図５４の「『死ね』とか『殺す』という言葉が使われることについてどう思いますか？」の質問に対して、「使ってはいけない」が減少（６２％→２６％）する。逆に「冗談や遊び」が増加（３１％→６４％）する。

表２４は死の普遍性との相関関係を調べたものである。「そのような言葉を聞いても何とも思わない」の

集団は死の普遍性に対する認識が弱い。

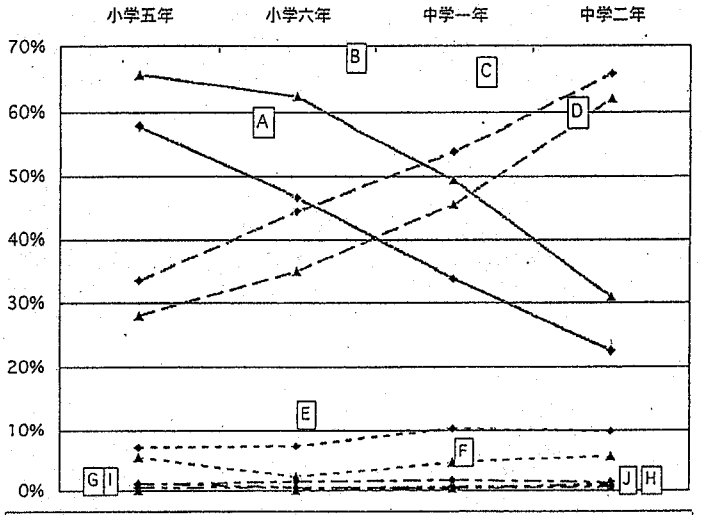

図54
A:そのような言葉は使ってはいけない 男子
B:そのような言葉は使ってはいけない 女子
C:冗談や遊びでいっているときは気にしない 男子
D:冗談や遊びでいっているときは気にしない 女子
E:そのような言葉を聞いても何とも思わない 男子
F:そのような言葉を聞いても何とも思わない 女子

表24 Q4:あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q24:「死ぬ」とか「殺す」という言葉が使われることについてどう思いますか？（横）

	質問内容	そのような言葉は使ってはいけない		冗談や遊びでいっているときは気にしない		そのような言葉を聞いても何とも思わない		そのような言葉は聞いたことがない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	749	41.4%	911	50.3%	127	7.0%	15	0.8%	9	0.5%	1811	84.1%
	たぶん死ぬ	120	47.6%	118	46.8%	9	3.6%	3	1.2%	2	0.8%	252	11.7%
	たぶん死なない	15	48.4%	9	29.0%	5	16.1%	1	3.2%	1	3.2%	31	1.4%
	死なない	16	28.6%	29	51.8%	8	14.3%	2	3.6%	1	1.8%	56	2.6%
	無回答	1	33.3%	2	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.1%
	男 女 計	901	41.8%	1069	49.7%	149	6.9%	21	1.0%	13	0.6%	2153	100.0%

（１０）ナイフの所持や自傷行為について

①ナイフの所持

図５５の「今までに自分の身を守るためにナイフやカッターなどを学校に持ってきたことがありますか？」の質問に対して、数は少ないものの学年が進むにつれて所持率は漸増（１回以上経験のある率が３％→９％）する。中２女子で「５、６回以上ある」が男子の２倍存在することに注目したい。

表２５は死の普遍性との相関関係を調べたものである。５、６回以上ナイフを持参したことがある集団は死の普遍性に対する認識は弱い。

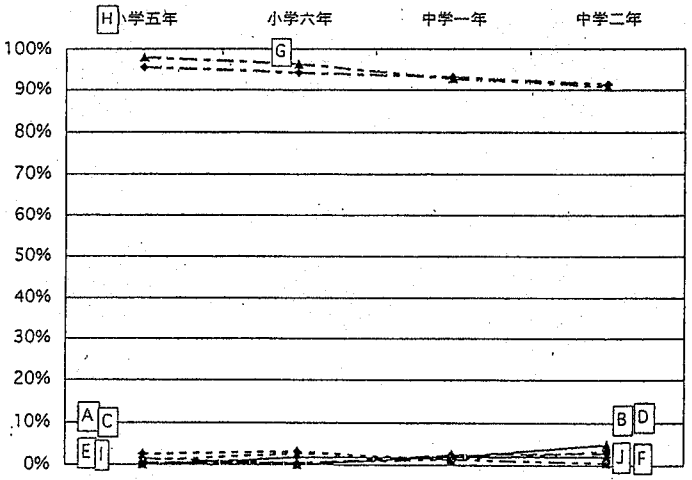

図55
A:５，６回以上ある 男子
B:５，６回以上ある 女子
C:２，３回ある 男子
D:２，３回ある 女子
E:１回ある 男子
F:１回ある 女子
G:ない 男子
H:ない 女子
I:無回答 男子
J:無回答 女子

表25 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q25:今までに自分の体を守るためにナイフやカッターなどを学校に持ってきたことがありますか？（横）

	質問内容	５，６回以上ある		２，３回ある		１回ある		ない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	37	2.0%	31	1.6%	47	2.5%	1751	93.0%	16	0.9%	1882	87.4%
	たぶん死ぬ	0	0.0%	3	1.5%	3	1.5%	194	97.0%	0	0.0%	200	9.3%
	たぶん死なない	1	4.3%	1	4.3%	0	0.0%	21	91.3%	0	0.0%	23	1.1%
	死なない	3	7.5%	1	2.5%	0	0.0%	35	87.5%	1	2.5%	40	1.9%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	87.5%	1	12.5%	8	0.4%
	男 女 計	41	1.9%	36	1.7%	50	2.3%	2008	93.3%	18	0.8%	2153	100.0%

②自傷行為

図５６の「今までに自分の体をナイフやカッターなどで傷つけたことがありますか？」の質問に対して、「ない」は９２％から８３％に漸減する。中学で「５、６回以上ある」は女子がやや多く、その他は男子の方が頻度が高い。

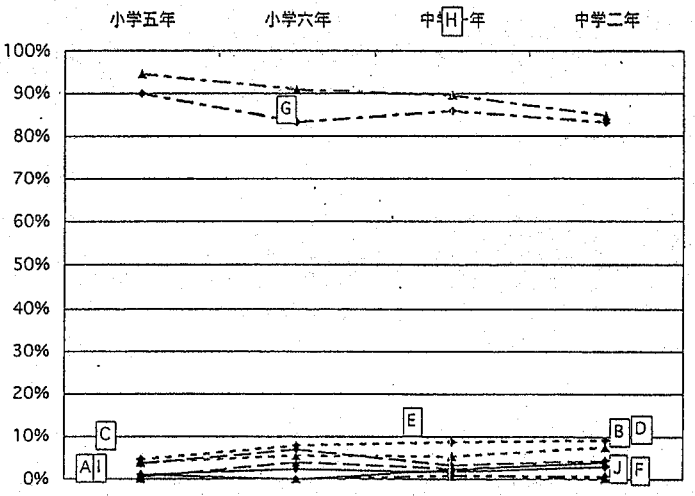

図56
A:５，６回以上ある 男子
B:５，６回以上ある 女子
C:２，３回ある 男子
D:２，３回ある 女子
E:１回ある 男子
F:１回ある 女子
G:ない 男子
H:ない 女子
I:無回答 男子
J:無回答 女子

表２６は死の普遍性との相関関係を調べたものである。５、６回以上自傷行為をしたことがある集団は死の普遍性に対する認識がやや弱い。

表26 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q26:今までに自分の体をナイフやカッターなどで傷つけたことがありますか？（横）

	質問内容	５，６回以上ある		２，３回ある		１回ある		ない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	42	2.2%	68	3.6%	126	6.7%	1638	87.0%	8	0.4%	1882	87.4%
	たぶん死ぬ	1	0.5%	9	4.5%	15	7.5%	174	87.0%	1	0.5%	200	9.3%
	たぶん死なない	1	4.3%	1	4.3%	3	13.0%	18	78.3%	0	0.0%	23	1.1%
	死なない	2	5.0%	2	5.0%	4	10.0%	31	77.5%	1	2.5%	40	1.9%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	87.5%	1	12.5%	8	0.4%
	男 女 計	46	2.1%	80	3.7%	148	6.9%	1868	86.8%	11	0.5%	2153	100.0%

（１１）メディアの影響について

①平日のテレビ・ビデオの視聴時間

図５７の「学校のある日、家でどのように過ごして

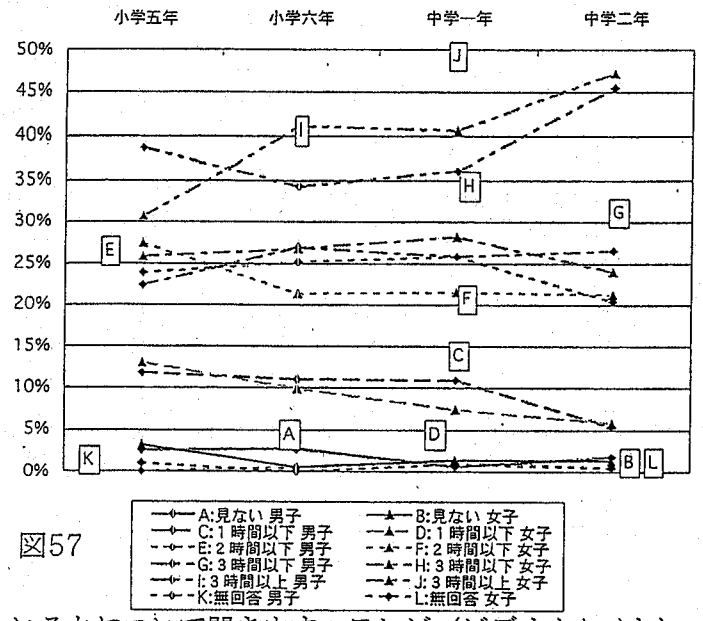

図57

いるかについて聞きます。テレビ（ビデオをふくむ）をどのくらい見ていますか？」の質問に対して、３時間以上の視聴が３５％から４５％に増加する４割弱の児童生徒が毎日３時間以上テレビを見ている。１時間以下、２時間以下の割合が漸減しており学年が進むにつれて視聴時間の長時間化傾向がみられる。死の普遍性及び絶対性に対しては相関関係はなかった。

②平日のゲームをする時間

図５８の「ゲーム（小型ゲーム機やパソコンを使ったゲームをふくむ）をどのくらいしていますか？」の質問に対して、「しない」と「１時間以下」を合わせた値は５５％で推移する。ゲームという性質上、男子の比率が高い。３時間以上は８％程度で推移する。

表２７は死の絶対性との相関関係を調べたものである。ゲームを毎日３時間以上する集団は死の絶対性に

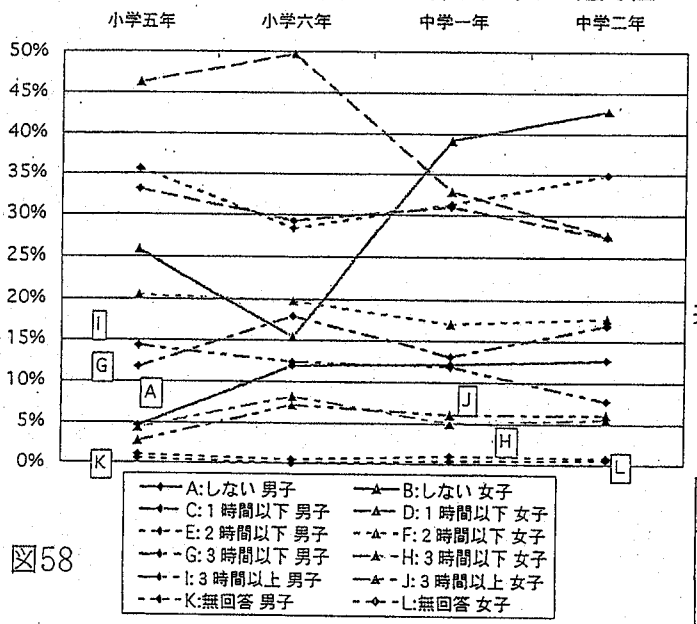

図58

対する認識がやや弱いが明確な相関関係はない。

表27 Q5:もし自分が死んだとしても生き返れると思いますか？（縦）
Q27:学校のある日、家でどのようにすごしているかについて聞きます。
(2) テレビ(小型ゲーム機やパソコンでのゲームをふくむ)をどのくらいしていますか？（横）

	質問内容	しない		1時間以下		2時間以下		3時間以下		3時間以上		無回答	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	生き返る	52	26.0%	55	27.5%	48	24.0%	18	9.0%	24	12.0%	3	1.5%
	たぶん生き返る	65	23.8%	92	33.7%	70	25.6%	23	8.4%	21	7.7%	2	0.7%
	たぶん生き返らない	99	20.6%	177	36.9%	129	26.9%	49	10.2%	25	5.2%	1	0.2%
	生き返らない	249	20.9%	379	31.7%	305	25.5%	141	11.8%	114	9.5%	6	0.5%
	無回答	2	33.3%	2	33.3%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	16.7%
	男 女 計	467	21.7%	705	32.7%	553	25.7%	231	10.7%	184	8.5%	13	0.6%

③平日のパソコン（ゲーム以外）をする時間

図５９の「パソコン（ゲーム以外の使い方。例：メールやチャット、ホームページ）をどのくらいしていますか？」の質問に、「しない」は小５で６０％から３７％に低下し、小６から女子の方がパソコン（ゲーム以外）をしている。学年が進むに従って長時間化する。中２女子で１３％が３時間以上していることに注目したい。

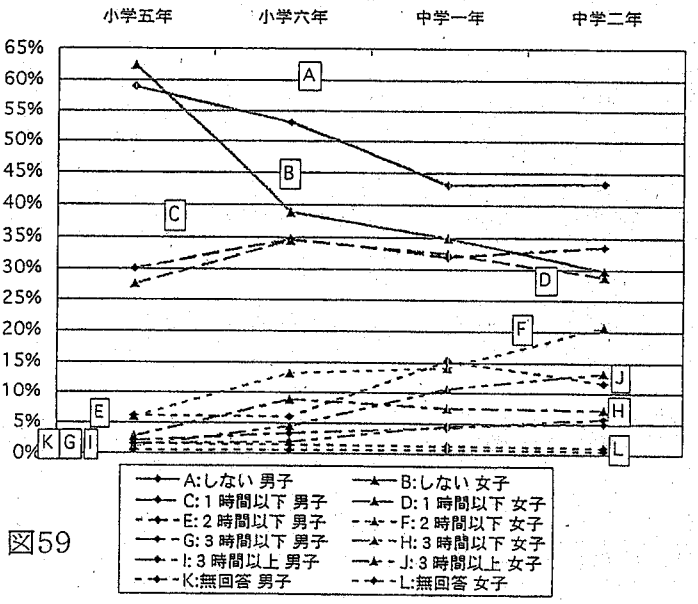

図59

表２８は死の普遍性との相関関係を調べたものである。毎日３時間以上する集団は死の普遍対性に対する認識が弱い。特に女子にその傾向が見られる。また表２９は死の絶対性との相関関係を調べたものである。

表28 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q27:学校のある日、家でどのようにすごしているかについて聞きます。
(3) パソコン(ゲーム以外の使い方。例:メールやチャット、ホームポージ)をどのくらいしていますか？（横）

	質問内容	しない		1時間以下		2時間以下		3時間以下		3時間以上		無回答	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	804	42.7%	600	31.9%	247	13.1%	105	5.6%	110	5.8%	16	0.9%
	たぶん死ぬ	103	51.5%	59	29.5%	20	10.0%	6	3.0%	11	5.5%	1	0.5%
	たぶん死なない	12	52.2%	5	21.7%	2	8.7%	0	0.0%	4	17.4%	0	0.0%
	死なない	12	30.0%	13	32.5%	2	5.0%	4	10.0%	7	17.5%	2	5.0%
	無回答	2	25.0%	4	50.0%	1	12.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
	男 女 計	933	43.3%	681	31.6%	272	12.6%	115	5.3%	132	6.1%	20	0.9%

表29 Q5:もし自分が死んだとしても生き返れると思いますか？
Q27:学校のある日、家でどのようにすごしているかについて聞きます。
(3) パソコン(ゲーム以外の使い方。例:メールやチャット、ホームポージ)をどのくらいしていますか？（横）

	質問内容	しない		1時間以下		2時間以下		3時間以下		3時間以上		無回答	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	生き返る	77	38.5%	64	32.0%	26	13.0%	8	4.0%	21	10.5%	4	2.0%
	たぶん生き返る	112	41.0%	97	35.5%	29	10.6%	17	6.2%	16	5.9%	2	0.7%
	たぶん生き返らない	218	45.4%	153	31.9%	65	13.5%	19	4.0%	22	4.6%	3	0.6%
	生き返らない	524	43.9%	366	30.7%	151	12.6%	71	5.9%	72	6.0%	10	0.8%
	無回答	2	33.3%	1	16.7%	1	16.7%	0	0.0%	1	16.7%	1	16.7%
	男 女 計	933	43.3%	681	31.6%	272	12.6%	115	5.3%	132	6.1%	20	0.9%

毎日３時間以上する集団は死の絶対性に対する認識が弱い。

④テレビの暴力シーンや殺人シーン

図６０の「テレビを見ているとき、人をなぐったり殺したりする場面が出てきたらどうしますか？」の質問に対して、消したり、チャンネルをかえる比率は減

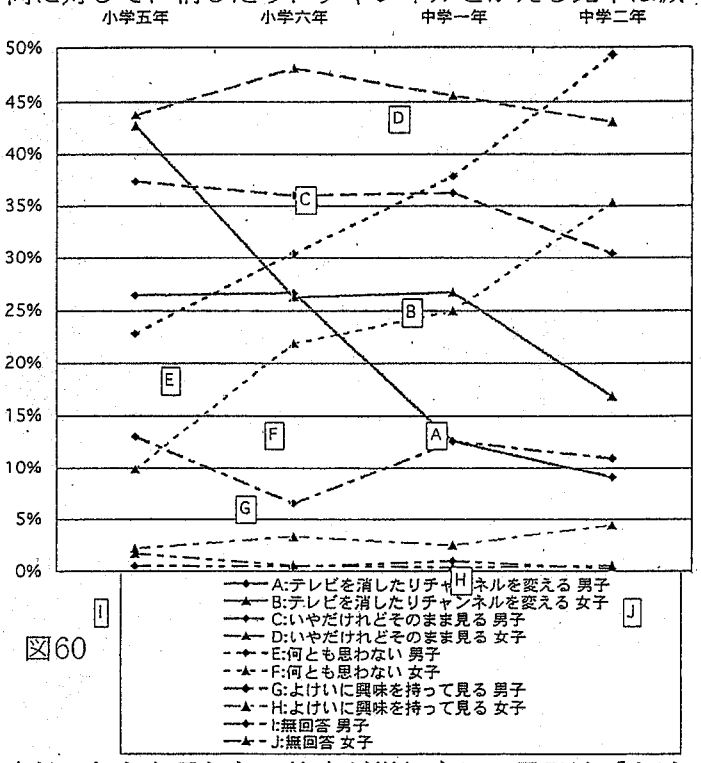

図60

少し、何とも思わない比率が増加する。男子は「よけいに興味を持って見る」が１０％以上いる。男子の方がなぐったり、殺人シーンに対する抵抗感が薄い。

表３０は死の普遍性との相関関係を調べたものである。「よけいに興味を持って見る」と答えた集団は死の普遍性に対する認識が非常に弱い。また表３１は死の絶対性との相関関係を調べたものである。「よけいに興味を持って見る」と答えた集団は死の絶対性に対する認識が弱い。

表31 Q5:もし自分が死んだとしても生き返れると思いますか？（縦）
Q28:テレビを見ているとき、人をなぐったり殺したりする場面が出てきたらどうしますか？（横）

	質問内容	テレビを消したりチャンネルを変える		いやだけれどそのまま見る		何とも思わない		よけいに興味を持って見る		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	生き返る	26	13.2%	73	37.1%	67	34.0%	30	15.2%	1	0.5%	197	9.2%
	たぶん生き返る	54	19.9%	120	44.3%	82	30.3%	12	4.4%	3	1.1%	271	12.7%
	たぶん生き返らない	119	25.1%	188	39.7%	141	29.7%	23	4.9%	3	0.6%	474	22.2%
	生き返らない	245	20.7%	455	38.4%	389	32.8%	89	7.5%	7	0.6%	1185	55.6%
	無回答	1	20.0%	0	0.0%	4	80.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	0.2%
	男 女 計	445	20.9%	836	39.2%	683	32.0%	154	7.2%	14	0.7%	2132	100.0%

⑤ゲームの種類

図６１の「ゲームをしている人に聞きます。どのよ

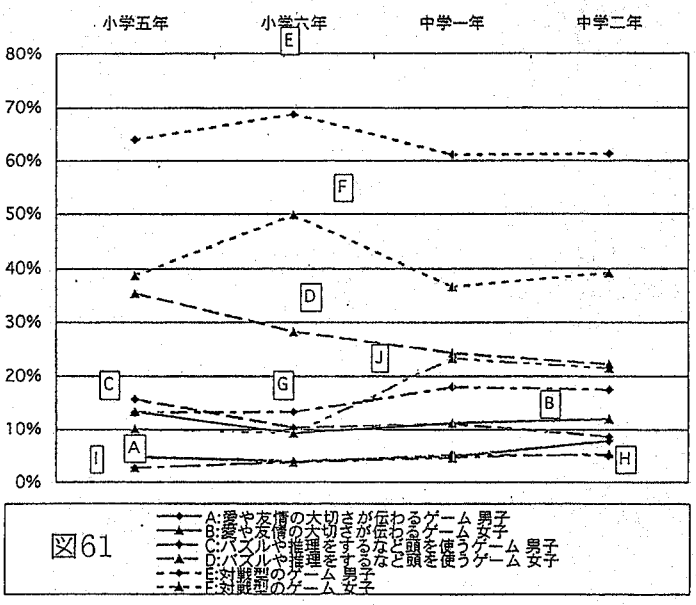

図61

うなゲームをしますか？」の質問に対して、男子の１５％程度がなぐったり殺したりするゲームをする。学年があがるにつれて微増する。女子も４％程度なぐったり殺したりするゲームをする。学年があがるにつれて微増（男子の約３０％）する。

表３２は死の普遍性との相関関係を調べたものであ

表30 Q4:あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q28:テレビを見ているとき、人をなぐったり殺したりする場面が出てきたらどうしますか？（横）

	質問内容	テレビを消したりチャンネルを変える		いやだけれどそのまま見る		何とも思わない		よけいに興味を持って見る		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	357	19.9%	716	39.8%	586	32.6%	126	7.0%	13	0.7%	1798	84.3%
	たぶん死ぬ	72	29.0%	94	37.9%	71	28.6%	11	4.4%	0	0.0%	248	11.6%
	たぶん死なない	6	20.7%	9	31.0%	10	34.5%	4	13.8%	0	0.0%	29	1.4%
	死なない	10	18.5%	16	29.6%	14	25.9%	13	24.1%	1	1.9%	54	2.5%
	無回答	0	0.0%	1	33.3%	2	66.7%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.1%
	男 女 計	445	20.9%	836	39.2%	683	32.0%	154	7.2%	14	0.7%	2132	100.0%

表32 Q4:あなたは自分がいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q29:ゲームをしている人に聞きます。どのようなゲームをしますか？（横）

	質問内容	愛や友情の大切さが伝わるゲーム		パズルや推理をするなど頭を使うゲーム		対戦型のゲーム		人をなぐったりしたりするゲーム		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	132	8.7%	259	17.0%	823	53.9%	166	10.9%	146	9.6%	1526	84.0%
	たぶん死ぬ	15	6.8%	49	22.3%	117	53.2%	15	6.8%	24	10.9%	220	12.1%
	たぶん死なない	0	0.0%	5	20.8%	13	54.2%	6	25.0%	0	0.0%	24	1.3%
	死なない	1	2.2%	3	6.7%	25	55.6%	11	24.4%	5	11.1%	45	2.5%
	無回答	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%	1	0.1%
	男 女 計	148	8.1%	316	17.4%	978	53.9%	199	11.0%	175	9.6%	1816	100.0%

る。「なぐったり殺したりするゲームをする」と答えた集団は死の普遍性に対する認識が非常に弱い。また表３３は死の絶対性との相関関係を調べたものである。人をなぐったり殺したりするゲームをする集団は死の絶対性に対する認識が弱い。

表33 Q5:もし自分が死んだとしても生き返れると思いますか？(縦)
Q29:ゲームをしている人に聞きます。どのようなゲームをしますか？（横）

	質問内容	愛や友情の大切さが伝わるゲーム		パズルや推理をするなど頭を使うゲーム		対戦型のゲーム		人をなぐったり殺したりするゲーム		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	生き返る	15	9.2%	22	13.5%	77	47.2%	33	20.2%	16	9.8%	163	9.0%
	たぶん生き返る	18	8.0%	35	15.6%	129	57.3%	18	8.0%	25	11.1%	225	12.4%
	たぶん生き返らない	31	7.5%	82	19.8%	226	54.6%	32	7.7%	43	10.4%	414	22.8%
	生き返らない	83	8.2%	176	17.4%	545	54.0%	115	11.4%	91	9.0%	1010	55.6%
	無回答	1	25.0%	1	25.0%	1	25.0%	1	25.0%	0	0.0%	4	0.2%
	男 女 計	148	8.1%	316	17.4%	978	53.9%	199	11.0%	175	9.6%	1816	100.0%

⑥パソコンと友だちの会話との比較

図６２の「パソコンをしている（ゲーム以外）人に聞きます。パソコンをするのと、友だちと話をするのとではどちらが楽しいですか？」の質問に対して、

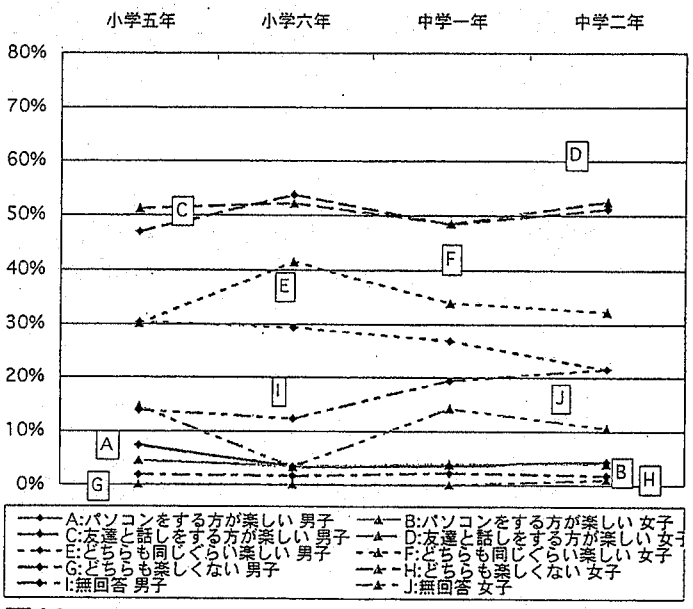

図62

「メールやチャット、ホームページなどの方が楽しい」割合は４％程度存在する。

表３４は死の普遍性との相関関係を調べたものである

表34 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q30:パソコンをしている(ゲーム以外)人に聞きます。パソコンをするのと、友だちと話をするのとではどちらが楽しいですか？（横）

	質問内容	パソコンをする方が楽しい		友達と話しをする方が楽しい		どちらも同じくらい楽しい		どちらも楽しくない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	51	3.9%	660	51.0%	387	29.9%	14	1.1%	181	14.0%	1293	88.0%
	たぶん死ぬ	3	2.3%	63	49.2%	36	28.1%	1	0.8%	25	19.5%	128	8.7%
	たぶん死なない	2	15.4%	4	30.8%	5	38.5%	1	7.7%	1	7.7%	13	0.9%
	死なない	2	6.7%	14	46.7%	6	20.0%	1	3.3%	7	23.3%	30	2.0%
	無回答	2	40.0%	2	40.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	0.3%
	男 女 計	60	4.1%	743	50.6%	435	29.6%	17	1.2%	214	14.6%	1469	100.0%

る。「パソコンの方が楽しい」と答えた集団は死の普遍性に対する認識がやや弱い。

（１２）「人のいのちの大切さ」に対する実感について

①いのちの大切さを教えてもらったか

図６３の「これまでに『いのちの大切さ』についてだれかに教えてもらったことはありますか？」の質問に対して、「教えてもらった」は８２％から６７％に漸減する。一方、「覚えていない」は１６％から２９％に漸増する。「教えてもらっていない」は３％で推移する。

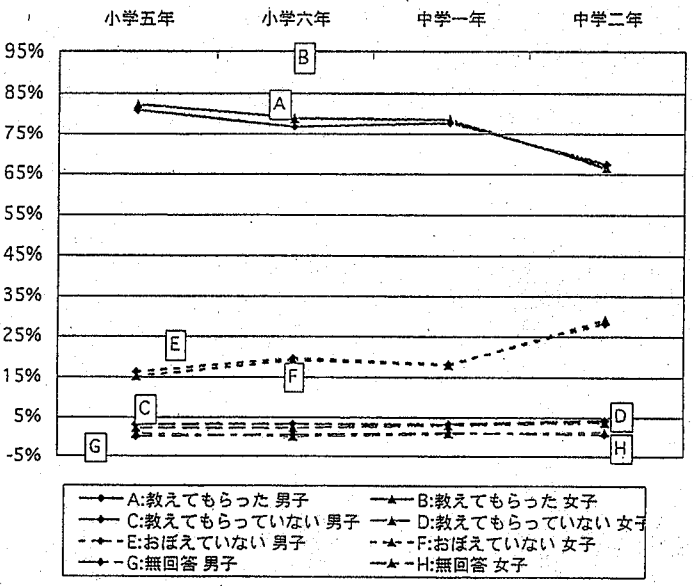

図63

表３５は死の普遍性との相関関係を調べたものである。「教えてもらっていない」と答えた集団は死の普遍性に対する認識が弱い。

表35 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q31:これまでに「いのちの大切さ」についてだれかに教えてもらった記憶がありますか？（横）

	質問内容	教えてもらった		教えてもらっていない		おぼえていない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	1409	74.9%	56	3.0%	406	21.6%	11	0.6%	1882	87.4%
	たぶん死ぬ	150	75.0%	7	3.5%	42	21.0%	1	0.5%	200	9.3%
	たぶん死なない	15	65.2%	0	0.0%	8	34.8%	0	0.0%	23	1.1%
	死なない	27	67.5%	5	12.5%	8	20.0%	0	0.0%	40	1.9%
	無回答	5	62.5%	0	0.0%	2	25.0%	1	12.5%	8	0.4%
	男 女 計	1606	74.6%	68	3.2%	466	21.6%	13	0.6%	2153	100.0%

②いのちの大切さの実感

図６４の「『本当にいのちは大切なんだ』と心の底から感じたことはありますか？」の質問に対して、「ある」は小学生までは８０％を超えるが中学でやや低下する（６５％）。その分、中学では覚えていないが増加する。「ない」は中２で５％から９％に増加する。

表３６は死の普遍性との相関関係を調べたものである。「大切と心の底から感じたことがない」と答えた

集団は死の普遍性に対する認識が弱い。

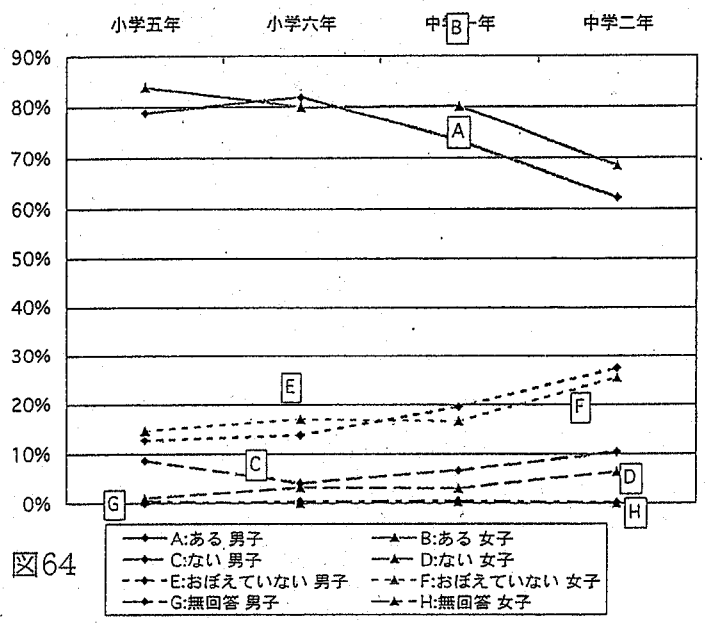

図64

表36 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q32:「本当にいのちは大切なんだ」と心の底から感じたことがありますか？（横）

	質問内容	ある		ない		おぼえていない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	1380	73.3%	115	6.1%	383	20.4%	4	0.2%	1882	87.4%
	たぶん死ぬ	160	80.0%	7	3.5%	32	16.0%	1	0.5%	200	9.3%
	たぶん死なない	17	73.9%	2	8.7%	4	17.4%	0	0.0%	23	1.1%
	死なない	30	75.0%	4	10.0%	6	15.0%	0	0.0%	40	1.9%
	無回答	6	75.0%	0	0.0%	1	12.5%	1	12.5%	8	0.4%
	男 女 計	1593	74.0%	128	5.9%	426	19.8%	6	0.3%	2153	100.0%

③生の充実

図６５の「今までに心の底から楽しかったことやうれしかったことがありますか？」の質問に対して、「あまりない」、「まったくない」が学年が進むにつれて微増（４％→７％）する。死の普遍性や絶対性との相関関係を調べたが明確な関係はなかった。

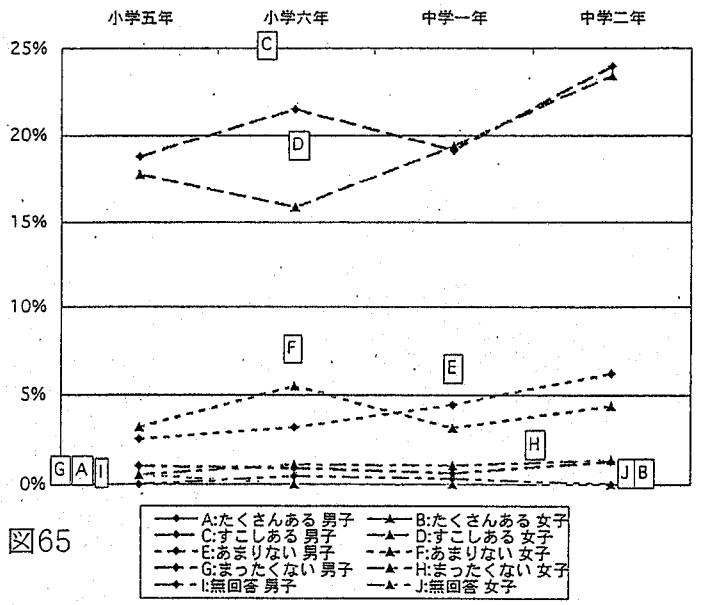

図65

④生きていることに対する感謝

図６６の「今まで、自分が生きていることに対して感謝（ありがとうという気持ち）の気持ちを持ったこ

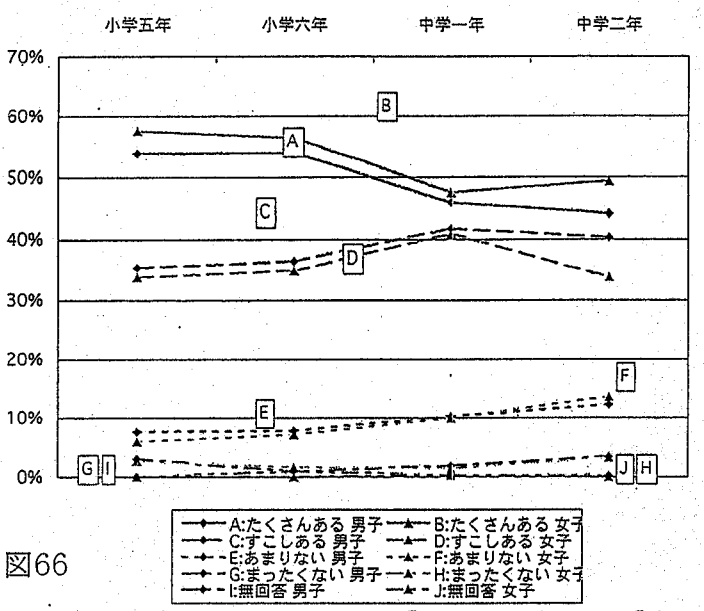

図66

とがありますか？」の質問に、「たくさんある」、「少しある」合わせて９０％から中学で８４％に減少する。「まったくない」は２、３％で推移する。あまりないと合わせた値は１０％から１６％へ漸増する。

表３７は死の普遍性との相関関係を調べたものである。「まったくない」と答えた集団は死の普遍性に対する認識がやや弱い。

表37 Q2:人はいつか死ぬと思いますか？（縦）
Q34:いままで、自分が生きていることに対して感謝(ありがとうという気持ち)の気持ちを持ったことがありますか？（横）

	質問内容	たくさんある		すこしある		あまりない		まったくない		無回答		合計	
		件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率	件数	比率
質問内容	死ぬ	926	49.2%	708	37.6%	197	10.5%	48	2.6%	3	0.2%	1882	87.4%
	たぶん死ぬ	104	52.0%	80	40.0%	13	6.5%	2	1.0%	1	0.5%	200	9.3%
	たぶん死なない	12	52.2%	8	34.8%	2	8.7%	1	4.3%	0	0.0%	23	1.1%
	死なない	23	57.5%	11	27.5%	3	7.5%	3	7.5%	0	0.0%	40	1.9%
	無回答	4	50.0%	3	37.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	8	0.4%
	男 女 計	1069	49.7%	810	37.6%	215	10.0%	54	2.5%	5	0.2%	2153	100.0%

（１３）「小学生や中学生による人を傷つける事件や殺人事件がおきています。このような事件がどうしておきるのか、思ったことを自由に書いてください」（自由記述）

結果を１６に分類した。［６５６人］

・自分と友人との関係が原因（仲間外れ、いじめ、差別、嫌がらせ、おどし、暴力、無視、物かくし）でストレスや不満がたまっているから。［１７９件　２７．３％］

・自分の気持ち（感情）をコントロールできないから。［８４件　１２．８％］

・悩み、不満、ストレスがあるのに相談しなかったから。（相談する人がいなかった）［４０件　６．１％］

・家庭教育（しつけ）に問題がある。［５３件　８．１％］

・こんなことは悪いことだ。あってはいけないことだ。防止策を考えるべきだ。［８４件　１２．８％］

・なぜこんなことがあきるのか分からない。やっている人の心理が分からない。[６１件　９．３％]
・加害者が悪い。重罰にすべき。[６件　０．９％]
・人のいのちの大切さが分かっていない。周りの人がどれだけ悲しむか（影響を与えるか）分かっていない。[６５件　９．９％]
・学校教育に問題がある。[５件　０．８％]
・気持ちは分かる。[４件　０．６％]
・メディアの影響（ゲーム、ドラマ、ニュース）[５９件　９．０％]
・お金、経済的問題[８件　１．２％]
・社会（大人たち）に問題がある。[２１件　３．２％]
・遊び半分。冗談の行き過ぎ[９件　１．４％]
・その他[１１０件　１６．８％]
・分からない。無回答[５２件　７．９％]

４　調査結果の考察と課題

今回のアンケート調査を１１項目の結果にまとめ、考察と課題を以下に記した。なお調査における特別なケースを補足として２点付記した。

（１）生命の有限性を確立するのは９才以降（小学３年生）である

死の普遍性と絶対性の理解は７才で深まり９才以降で認識が確立する。よってこの時期に、家庭や学校でいのちに関する学びの場や機会を提供する必要がある。

（２）生命をとらえる子どもの認識は大人と異なる

自動車を「生きている」ととらえる割合は小学４年生でも多く、子どもは動くもの、機能するものを「生きている」ととらえる傾向がある。

（３）「死んだ人は生き返る」と答える子どもは２０％程度存在し、死の絶対性の揺らぎがある

死の普遍性は年齢が上がるに従って確立していくが、これとは対照的に死の絶対性については年齢が上がっても「生き返る」と答える割合が２０％程度存在する。この理由について２点が考えられる。１点目は死の最終性に対する認識が大人とは異なるのではないかということである。赤澤正人（大阪大学大学院人間科学研究科）は小学生に死の意識と概念に関するアンケート調査（２００１年、調査対象小学１年～６年：６２５人）を実施した。それによると「死んだ人にものが見えると思いますか？」という質問に４５％が「そう思う」と答えている。また「死んだ人には気持ちがあると思いますか？」（そう思う７０％）、「死んだ人は手足を動かせると思いますか？」（そう思う２０％）と答えている。大人にとって死とは生命活動の不可逆的停止、つまり死の最終性を意味するが子どもにとってはそうではない。子どもにとってリアリティーのない死の概念は生との境界が曖昧であることが示される。２点目は「生き返る」を「生まれ変わる」と受け取って答えた可能性が考えられる。前述した長崎県教育委員会のアンケートでは「生き返る」理由として「他の何かに生まれ変わる」と答えている。これは宗教的心情を反映しているともいえる。しかし１点目の死の絶対性が揺らいでいるということは自他のいのちの大切さを認識できていないと考えられ、大きな課題をはらんでいる可能性がある。

（４）ペットの死の経験、墓参や葬儀の経験および家族との会話は死の普遍性の認識を高める

身近で具体的な体験や経験を積むことによって子どもは発達段階に応じて生命の有限性や死の概念を学ぶ。例えばペットの死に遭遇した時、子どもは生物学的な死を学び、子どもなりに喪失感や悲しみなどの感情の交流が生じる。また子どもを葬儀に連れて行くことは人の死を実感できる体験となる。その際、死者を偲び、死者に対する畏敬の念や死を悲しむ家族の気持ちを大人が子どもに伝えることができれば、いのちの大切さを学ばせるよい機会になるであろう。

（５）自然体験、温かい家族関係は生命の有限性の認識を高める

かつて子どもは様々な自然体験を通じて小さな生き物の死を経験してきた。しかし都市化した現代社会に生きる子どもは死を学ぶ経験に乏しい。自然体験とは虫取りや魚捕りを意味するだけでなく自然の中で手足を擦りむいたりするような身体感覚に訴える経験や、大自然の中で矮小な自己を意識するなど多様な体験を含む活動である。また温かい家族関係のなかで子どもはいのちの大切さや人の死の重大性の認識が育まれる

と考えられる。

（6）死への恐怖と生命の有限性の認識との間には相関関係がある

死への恐怖心は小学校高学年から中学にかけて減少する。死に対する恐怖心が小さい集団は死の普遍性に対する認識が弱い。死への恐怖が自然の感情であるとするならばこの減少は何の影響によるものなのか考える必要がある。

（7）メディア（テレビやゲームの暴力や殺人シーン、パソコン）は生命の有限性の認識に対して強い影響力がある

死の普遍性とゲームやパソコンの操作時間との間には相関関係がある。たとえば毎日ゲームやパソコンを３時間以上する子どもは「人は死なない」し、「死んでも生き返る」とみる割合が高くなる。（1）でも触れたが、小学１年生から小学３年生にかけては死生観が確立していく時期であるが、同時にこの時期にテレビやゲームおよびパソコンに触れる時間が急激に増加する。（4）、（5）でも述べたが生命の有限性の認識を高めるには実体験が有効であり、このようなディスプレーを通した仮想現実に触れることは大きな問題であると考えられる。またテレビの視聴時間とは相関関係は見いだせなかったが、殺人シーンや暴力シーンを積極的に志向する子どもは死の普遍性や絶対性の認識が非常に弱い。これはゲームについても同様の結果を得た。つまりテレビやゲーム、パソコンに長時間触れていても、家族や友人と楽しく健全に触れていれば問題はないと考えられる。反対にバーチャルなものを通して殺人や暴力シーンを批判力のない子どもがひとりで長時間触れることは課題をはらんでいると考えられる。ただ、相関関係があるからといって短絡的に因果関係があると断定することはできない。より詳細な研究が望まれる。

（8）小学校高学年から中学校２年生にかけて自殺や他殺に対する共感・容認が高まる

自殺や殺人に対する共感度が高まる傾向は看過できない状況を示している。これらに対する共感・容認を示す子どもは死の普遍性に対する認識が弱い。年齢とともに死への関心は漸増するが倫理感は育っていない。子どもたちに向かっていのちに対する心に響く力強いメッセージが求められる。

（9）ナイフの所持、自傷行為、言葉の荒れ（死ね、殺す）と死の普遍性に対する認識には相関関係がある

「死ね、殺す」といった言葉の荒れが中学生になると急増する。ナイフの所持や自傷行為の経験者は１クラス数名程度存在し、特異な例とはいえない。生命の有限性の認識が揺らいでいる現状のもとで生命尊重に反する危うい事象の中に生きている子どもたちの現実が浮き彫りになり、いのちの大切さを学ばせる教育の必要性を裏付けるデータが得られた。

（１０）自己肯定感と自殺願望とには相関関係がある

自己肯定感が中学生になると急激に低下する。中２女子では７０％以上が自己肯定感がない。自己肯定感は自殺願望と強い相関関係があるので、人間関係を築くことを苦手とし、他者理解もできない子どもたちに対しては自己肯定感や人間関係を構築する力をつける必要がある。

（１１）「人のいのちの大切さ」に対する実感と死の普遍性に対する認識には相関関係がある

「『本当にいのちは大切なんだ』と心の底から感じたことがある」と答える割合が中学生になるとかなり減少する。生命尊重の精神をどのように実感させることができるのか、大人は真剣に考えなければならない。

補足（1）生と死の教育はいのちの大切さを目指す教育である

今回の調査の中には、われわれ兵庫・生と死を考える会の「生と死の教育」研究会に所属している教員が、小学校と中学校で生と死の教育を実践している学校が２校含まれている。中学校では週２時間、８ヶ月間死を通していのちの大切さを学んできた。この中学校のデータを全体と比べると、死の普遍性に対する認識が高い結果を得た。また「これまでに『人のいのちの大切さ』についてだれかに教えてもらったことがありますか？」や「『本当にいのちは大切なんだ』と心の底から感じたことはありますか？」の質問に対して肯定的

な答えを多く得た。学校教育の中での実践がいのちの大切さを学ぶことに結びついている例といえる。

小学校では「いのち」を軸にした学級経営のもとで、小学３年生の総合的な学習の時間を「いのちと健康」というテーマで、性教育や保健指導、安全指導と絡ませながら、子どもたちの身の回りを見つめさせ、いのちの大切さについて授業を行ってきた。また我が子を早いうちに病気で亡くした女性をゲストティーチャーとして、子どもたちに話をしてもらうなどの学習を重ねた。この小学校のデータを全体と比べると死の普遍性の認識は高かった。しかし死の絶対性については高い割合で「生き返る」と答える逆転の結果となった。この理由としてゲストティーチャーを通した我が子に対する特別な思いが影響を与えているものと思われる。

補足（２）死生観に問題を抱える不登校児童・生徒

今回、不登校児童・生徒２０人（男子９人、女子１１人）にも同じアンケート調査を実施した。全体のデータと比較して死の普遍性や絶対性の認識は高かった。しかし死にたいと思ったことは多く、その理由は友人に関する原因は少なく親や家庭、および自分自身のことが多い。またその際の解決方法として自傷行為が多い。自己肯定感が低く、家族の人に愛されていると答える割合が低い。自殺を容認する割合やナイフの所持の割合が高い。テレビやゲーム、パソコンの操作時間が長く、友人と話をするよりパソコンをする方が楽しいとする割合が高い。またいのちの大切さを教えてもらったこと、心の底からいのちは大切なんだと感じたこと、心の底から楽しかったことやうれしかったこと、自分が生きていることに対して感謝の気持ちを持ったことに対して肯定的は答えが少ない。

５　提言

人が生きていく上で自然と身につけていた死生観が揺らいでいることが今回の調査で明らかになった。人が生きて死ぬ。死は生命活動の絶対的な停止であり、肉体の不可逆的な消滅である。この自明の死生観が揺らいでいる現実を前に、子どもにいのちの尊さを教えたり実感させることは困難である。以前は自明のことであったこれら「人間としての常識」が揺らいでいる原因は何であろうか。高度技術社会と高度情報化社会の到来や家族関係の変化などが考えられる。高度技術社会によって身体を意識しない快適な生活が実現した。一方で自然を実感しにくい環境の中で暮らしている。それは究極の自然現象である「死」を隠蔽する社会でもある。一方インターネットやゲームなどディスプレーを通して大量の情報にさらされている現実がある。個に引きこもりコミュニケーションが苦手な子どもたち。重大な少年事件がおきるたびに指摘されるいのちの教育。

今回の調査で子どもたちの死生観の問題点が浮き上がる結果となったが、これはとりもなおさず大人社会の弊害の現れであるといえる。とりわけ学校教育に携わるすべての教育者はいのちの教育の重要性を共通認識し、地域の実態や家庭との連携をふまえ、具体的な実践が望まれる。我々は今回の調査から以下の５つの提言をしたい。

（１）発達段階に応じて生命の有限性に触れる体験の機会を増やす。（例：ペットの死、墓参、葬儀への参加）その際、悲しみや生命に対する畏敬の念などを伝えるなど実感を伴った心の交流が必要である。また死生観の形成に影響を与える自然体験を十分に経験させる。

（２）死の持つ意味を通していのちの尊さを考えさせる教育（生と死の教育）を継続的に実施すること。

（３）死生観が確立していく小学１年生から３年生にかけて長時間にわたって暴力や殺人シーンに触れることは問題がある。また学校教育においてメディアを主体的かつ批判的に読み解く力（メディアリテラシー）の充実を図る。

（４）自己肯定感やコミュニケーション力をつける体験的な教育を推進する。

（５）死を通していのちの尊さを考えさせる教育（生と死の教育）を実施する上で発達段階に応じた教材が必要である。子どもたちが心も体も動かしながら、いのちの大切さを実感できるテキストやプログラムの開発が課題である。

※自分を含めたすべての生命に死が訪れることを「死の普遍性」と定義する。死ねば生き返ることはできないことを「死の絶対性」と定義する。また死の普遍性と絶対性を合わせて「生命の有限性」と定義する。

※相関関係についてはχ^2（カイ）２乗法による統計処理を実施していない。